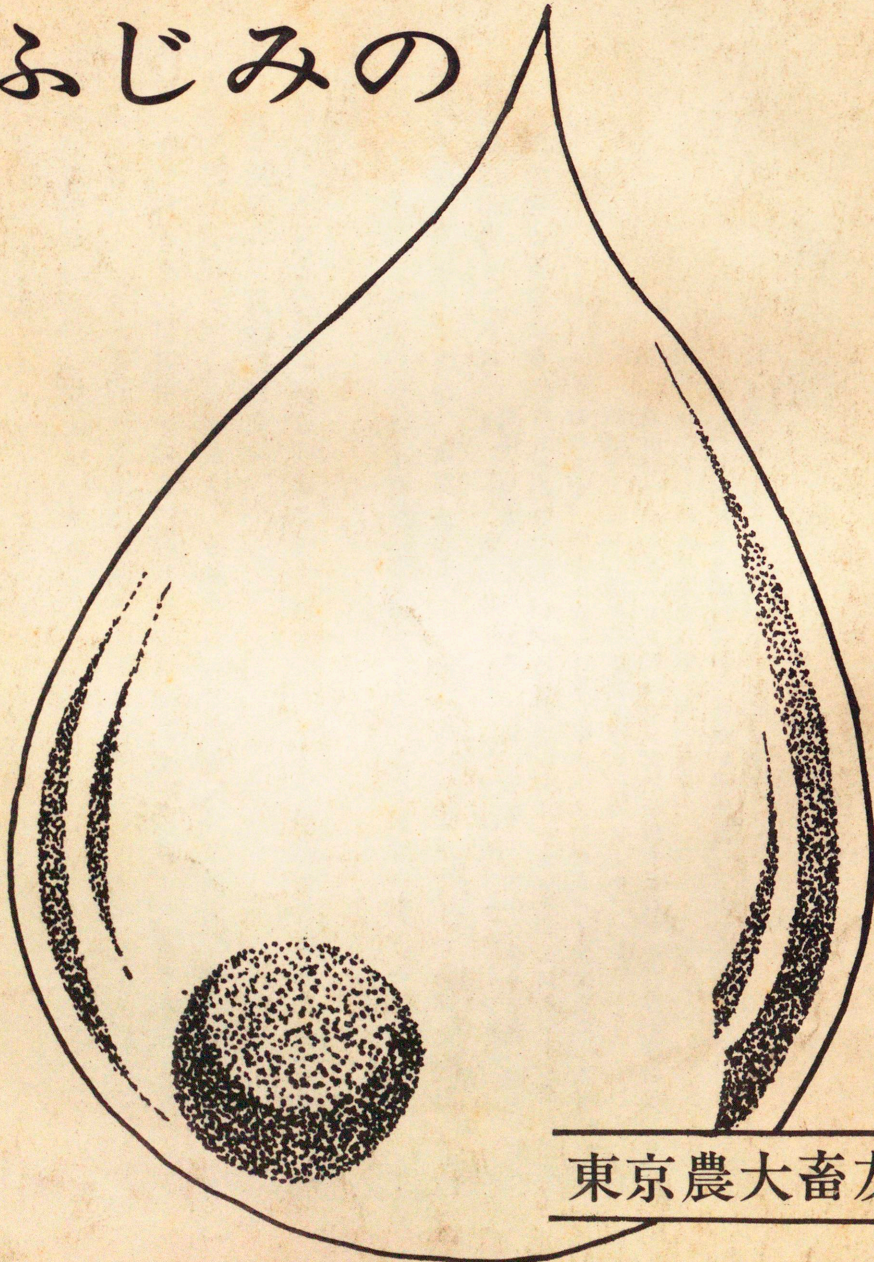


ふじみの



13

東京農大畜友会

## 表紙の言葉

表紙デザイン 畜産二年 国分良彦

恋愛、友情、努力、哀愁、惜別、追憶……の中に生きる涙。涙と一緒にパンを食べた者でなければ人生の味はわからない(ゲーテ) という言葉があるが、やたら安易に涙を浮かべるのはジャリで涙を知らぬ者はハ虫類以下、しかし哲学者は涙を浮かべないとか。  
最近「泣いてこそ人間」の人間の涙論が主流だそうだが昔の武士道では「涙を耐えてこそ人間」だった。  
しかし何しろ戦いに勝った強い男の涙、とかは側から見ても仲々、美しいものではないか。(PBより)

## 巻頭言

畜友会委員長 平 栄 一

“人生で最も貴重な瞬間、それは決断の時である”

その場の現状をどうみつめ、どう受け取りどのように対処してゆくべきか。物事を成功に導くものは、自信と信用と実績(能力)であり、今必要なのは、その一つ一つのことに関心自分の全知全能を傾け、それらを逸早く得る事ではないのか。

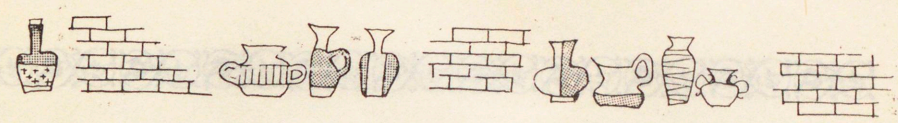
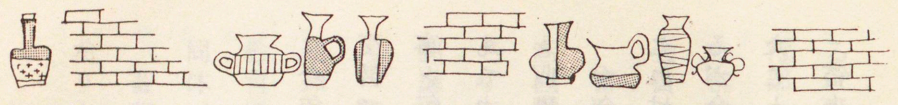
しかし、それらは易く得られるものではない。まして信用などは失うのは易く、取り戻すのは容易ではない。

人生に常に緊張を欠くことなく、学園においては畜友会を軸に団結し、社会においては限らない可能性を信じ、何ごとにおいても、自信と余裕をもって、「どんとこい」とそういえる人になろうではないか。

最後に諸君の心に刻んでもらいたい  
吾唯知足と……

ふじみの 第 13 号

巻頭言	畜産学科と畜友会	畜友会委員長	平 栄	1
タンパク質生産	発想の転換	畜産学科長	鈴木 正三	4
動物蛋白質摂取の水平的思考と 多量摂取へのアプローチに就いて	家兎の過剰排卵と妊娠	助 教 授	杉村 敬一	6
家畜の育成にあたって	農業の自律性	畜産学科主事	伊藤 澄彦	7
実践家畜生理の神秘	憂鬱な私の動物観	畜産一年	石島 芳郎	9
山地酪農	山地酪農について	畜産二年	吉 安 二 郎	14
山地酪農について	山地酪農について	畜産三年	上 山 定 郎	15
無題	雑感(一)(二)	夕 暮	秋 元 久 忍	20
雑感(一)(二)	畜産一年	思 出	佐 藤 久 晴	22
無題	畜産一年	畜産二年	佐 野 哲 史	27
雑感(一)(二)	M · S · S	畜産二年	匿名寄稿	26
無題	25 24	畜産二年	匿名寄稿	26
特 集	LOVE · POEM	畜産二年	匿名寄稿	27
貴 女		畜産二年	匿名寄稿	27



愛しい人	畜産二年	T		27
A · P O R T R A I T · O F · L O V E (一)(二)	畜産三年	匿 名 寄 稿		28
ヒョットとしたら又失恋	畜産二年	匿 名 寄 稿		29
雑記帳の中から	畜産二年	K		30
あるやさしさから	畜産二年	F		30
風の似顔絵より	畜産二年	K		31
雑記帳の中から	畜産二年	K		31
記 行 文	畜産二年	K		31
ニュートリンス・ラブソング	畜産二年	朴 念 人		32
随 想	畜産二年	上 山 定 利		41
冬の日の思い出	畜産二年			41

研究室だより	畜産二年	45
家畜育種学研究室	畜産経営学研究室	45
家畜繁殖学研究室	畜産物利用学(肉)研究室	46
家畜飼養学研究室	畜産物利用学(乳)研究室	46
家畜衛生学研究室		44
昭和四十八年度畜産学科卒業論文題目一覧表		48
昭和四十八年度畜友会行事報告		55
昭和四十八年度畜友会会計報告		56
畜友会規定		57
編集後記		60

## 畜産学科と畜友会

畜産学科長 鈴木正三

今年も畜友会の総会の時期がやって来た。過ぎた一年の跡をふり返る時期でもある。役員交替で新メンバーによって執行部が組織され、卒業生の送別会、続いて春の新生の歓迎行事と毎年定って繰り返されるスケジュールである。その年の執行部によって充実した一年ともなり、あるいは無為な一年ともなる。執行部業績の品定め批判は大体春から秋に至る活動と収穫祭での活躍によってなされるのが常である。

今年の畜友会は実に充実した足跡をのこし活躍発展を遂げたことは否めない事実である。これは一にその執行部の運営のよろしきを得たことは勿論のこと高く評価するところであるが会員である畜産学科全学生が一致協力して大いにその目的に向って積極的に勇躍前進したことに他ならないものと考ええる。

畜友会は今更贅言を要するところではないが畜産学科全学生をもって構成される団体である。執行部はたゞ各メンバーから信任された一部に過ぎない。従って畜友会発展の基調は執行部の活躍は勿論のこと畜産学科全学生の協力団結以外に何も無い。すなわち今年の畜友会の前進的業績は執行部と会員学生の一致協力による果実である。こゝに執行部各位並びに全会員に対して敬意を表するものである。

畜友会はもともと学生全員の親睦を目的として成立され、同じ専門の道を進む者が大学生活四年間を最も有意義に、収穫の多きを期待して組織されたものである。これがとりもなおさず畜産学科の健全な発展につながるものである。畜産学科の健全な発展は畜友会の円満な前進にかかっている。今年の収穫祭は実に優秀な成績で終始した。これが畜友会の潜在力であり、持ち前の特質である。今後共自重自戒歪められることなく正しく大いにその力その質を発揮して前進することを期待したい。畜友会と畜産学科、正に車の両輪の如くである。専門教育に向上と完璧を願う畜産学科と学生生活に平和と親睦を与える畜友会とは文字通り一心同体、農大での特徴的存在でもある。

畜友会の委員長以下各役員諸君を始め学生諸君の今年度の健闘を慶び将来の一層の発展を希うものである。

## タンパク質生産

教授 杉村 敬一郎

畜産の意義の大部分が高級タンパク質の生産にありと規定し、動物性油脂の方を全く度外視してしまつてよいかどうかと云えば大いに問題となる。しかし、人類の保健と云う視点に立つて両者の重要性の比率はどの位なのかと云うことは、これから我々が考えておくべき一つの課題であることは確かだと思ふ。畜産業の採算を考へる上でも、飼料として購入する原材料のうち炭素源と窒素源のそれぞれの該当原価がどの位の割合なのかを算出したい。良い調査方法はないものだろうか。

現在の企業採算などを一応度外視して、将来、人類が食糧危機に見舞われるとするならば対象動物（生物）の種類も大いに拡大して微生物タンパク質生産も畜産人の手で取り進めなければならぬ。このときはかなりな程度第二次産業方式の農業と云うことになる。さらに養鶏や養豚など、中小家畜の飼育方式も土壌と直接関係の少ない方向に移行する傾向ももつてであろう。そのようにな

っても「糧生産」に要する労働と「一般の工業」労働との間には本質的な差異があることを感ずるのである。この差の本質に関する名答がほしいものである。政治・行政上、両種の労働は一律に扱われていることを不満に思ふけれど、明確な定義づけと、全国民の意識への定着がないと行政的に反映させることも困難だからである。

我々畜産人として、又大学人として考えてみたいことが多々あるけれど「学問の進歩」と「庶民の生活」との間に或る種の断層がある限り実現しにくいことである。この断層を埋めることは学問の水準を当面の応用面のみへと下げることによって達せられるのではなく、学問から技術、技術から庶民生活への一連の連帯を構築することによって達せられるのである。現在の在學生の中にも、将来、学識者、研究者としての途を歩む者もいるだろう。しかし、多くが実社会に大学で得た学問を展開する使命をもっているゆえに、教職員と在學生との共同の構築作業が将来の此の問題解決の発端となるのではなからうか。この意味において畜産学科の「畜友会」の存在意義は、今各人にそれが自覚されている程度の如何に拘らず、きわめて大きいと思わざるを得ない。

(一九七三・一二・三 畜友会総会の日)

## 発想の転換

助教授 吉村 喜彦

『地球に定員があるか』ということが論じられている。いま世界の総人口は約三六億で二〇世紀の初期の一六億から、七〇年間に二・三倍にふえている。現在世界全体の平均人口増加率は年間二・一%といわれているので、この計算でいくと、いまの人口が二倍になるためにはわずか三三年しかかからないで、七〇億余の人口をもつて二二世紀をむかえることになるのである。

人口が倍になると、とうぜん倍の食糧が生産されねばならない。ところが地球の陸地面積のうち、食糧生産に利用できると推定されるのはせいぜい四分の一で、しかもそのおよそ半分はすでに現在農地として利用されている。とすると、残りの半分を開拓してもなんとか三〇年後の世界人口がやしなえる計算になるから、二二世紀の後半をすぎると大変な食糧飢餓になるのではないかということが考えられる。しかし、いかに科学技術が発達したとしても人類が新石器時代いらい五千年以上かかって

開拓してきたいまの農地と同じ面積をどうしてあと三〇年で開拓することができようか。このように推理してみると、二二世紀初めまでに倍の農業生産物を確保するということは、不可能ではないにしても大変困難な問題といえよう。

たとえば、畜産の場合世界で年間牛肉を三、九〇〇万トン（約四、〇〇〇万トン）を消費している。世界人口一人あたり平均年一〇・八kg（日本人は、年一人あたり二・七kgの消費）となっている。これが、先年の世界食糧会議の発表によると、一九八〇年には一六五万トン不足するということである。これは現在の消費量で計算すると七年間で五%の（人口増加に対する）牛肉不足ということになるから、二二世紀の初めには現在の最低二〇%減ということになり、世界人口一人あたり年平均八・六kg（日本人は二kg）に減ってくるということになる。開発輸入だの、外貨保有力によって輸出国から買入れればよいといういまの考え方はどうなるかといえれば、この考え方は日本サイドの考え方で外国には通用しなくなってくるのである。そのよい例に、今日の石油問題がそれである。金はいくらでも出すといっても、アラブの方では「ノー」である。いまや世界は金さえだせば買える、金持の国は買えて、貧しい国は買えないという考え方は、

外貨の豊富な国は満服し、貧しい国は飢餓状態になるというようなことは、国際的に許されなくなってきた。発展途上国を援助し、彼等に経済力を与えるための技術援助、経済援助をしながら、食糧や石油を配分して貰うという姿勢でないと認められないように世界の体制が変わってきたのである。

そのような世界の進む方向に逆行して、農地を三〇万ヘクタール工場用、宅地用に転用しようとしているのは、あまりにも近視眼的ではなからうか。石油中心の第二次産業体系は、いまや壁にぶつかつたのである。石炭を捨て、炭を捨て、植林を顧みず、石油公害を頂点として自然破壊を進めてきた日本産業は、根本的に考え直さなければならぬときに直面している。

そこで、われわれ畜産学徒として見直さなければならぬのは、畜産もまた公害の一部を担わされてき、このままでは進めなくなったのである。そして一方では食肉・牛乳の不足と増産の要求があり、他方では多頭飼育化を押しやる公害規制の問題があり、それを同時に解決していかなければならないという困難にぶつかつてきている。そして、単に畜産を畜産の問題として解決することはできなくなつた。

日本産業の新しい方向と、農業生産の世界的見地に立

### 動物蛋白質摂取の

#### 水平的思考と多量摂取

#### えのアップローチに就いて

助教授 伊藤 澄 磨

と誠に尊大な掲題で申し訳けないが早い話「肉屋にあんまりもうけさせないでたくさん肉を喰べるには」と書く格調が下るから前記の様になつた次第なのです。仔豚一万円、エサ一万二千円、豚舎消却その他三千円、飼育手間賃三千円、計二万八千円で100kgの生豚が出来て60kgの精肉とすれば四六六円で1kgの肉となりましょう。

五〇〇円以下ではマトンも買えないこのごろです。今ここで流通機構について云々する心算はないのです。只、現在七〇〇万頭以上の頭数を日本の頭数も近く二倍になる日も遠くないはずだ。そんな時でも清潔な肉屋の店頭でデジタル・バランスの示す数学に従つて支払いをすませ幸福そうに二〇三〇〇の包みを泡いて帰るおかみさん連の姿が続くのでしようか。

私はその姿がもう消える頃だと考えたいのです。その時それに代つて月に一度か二九月に一度台所の調理台に

つた上での位置づけが必要であり、その中で畜産の占めるウェイトが明らかにならなければならない。とする畜産のビジョンは今日の畜産学の範囲だけでは生れてこないだろう。まして、畜産学のビジョンは畜産学の範囲内からだけでは求められないであろう。ただ明らかなることは、いまのように畜産の動物蛋白質増産の必要と重要性が唱えられる時はないし、事実大衆が、大衆のための畜産物の供給を望んでいるということである。この事実をふまえた上で、これからの畜産学の体系はどうあるべきであるかという問題提起に対して、教授側も学生側も一緒になつて考えていかなければならないのではなからうか。そして、この問題が目先の、小手先のことでないだけに、長期的展望の上にたたねばならないという事も事実であろう。

ともあれ、すべてにおいて発想の転換をすべきときであり、その青写真は残念ながら未だ試行錯誤の中にあるのである。畜産学徒の奮起を切望するものである。

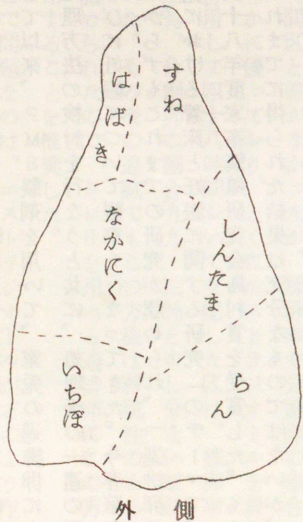
#### 肉の塊が乗り

母親 「ハイ しんたま」  
子供 「しんたま 500g 朝鮮焼ね」  
母親 「はい らん下」  
父親 「らん下 300g スキ焼用か」  
母親 「ハイ、ロース 六枚」

とビニール袋へ入れる  
とビニール袋へ入れられる

と云う家庭の一時が出来て良いものと考え度いのです。その時女の性の内側で泣いたおかみさん連も生きていく世代にその性を昇華させる事が可能となりましょう。しかし新宿の大手の金物屋で売れる牛刀が年間二〜三十本産が二〜三本、これが現状なのです。

牛もも肉細分図



## 家兎の過剰排卵と妊娠

畜産学科主事 石 島 芳 郎

性線刺激ホルモン（ゴナドトロピン）の注射による家兎の過（剰）排卵誘起は、受精卵子の移植（人工妊娠）、人工多胎（過剰妊娠または産子数増加）、卵子の研究などに広く応用されていて、これらから得られた知見は、家畜の人工妊娠、産子数の増加などの実用研究ならびに生殖生理学の基礎研究の発展に貢献してきた。

この家兎の過排卵誘起の方法は、これまで下垂体前葉性ゴナドトロピンまたは妊馬血清性ゴナドトロピン（PMS）を前処理し、ついで妊娠絨毛性ゴナドトロピン（HCG）か黄体形成ホルモン（LH）を追注する方法があるが、応用に際し残された問題も少なくない。例えばPMSとHCGによる過排卵誘起の場合には、まだ効果も充分でなく、個体による変動も大きい。また、過排卵処理が卵巣におよぼす影響や処理後の卵子の動態など基礎的な面の観察が不十分である。さらに、過排卵を応用して産子数増加をはかる分理では、処理家兎の妊娠成績

が芳しくなく、その原因もよくわかっていない。

筆者はこの点に着目し、昭和三十九年四月に本大学に奉職して以来、PMS製剤を用いて、家兎の過排卵に有効な処理方法の検討を行なうと共に、処理後の一連の現象ならびに妊娠について観察を行なってきた。今春筆者は、はからずもこれまでの研究が認められ、「過排卵処理家兎における着床と妊娠に関する研究」のテーマで、昭和四十八年度家畜繁殖研究会島村賞を受賞した。もとよりこれまで得られた結果は充分なものではないが、わが国ではこの種の研究が少ないので、ここに、これまでの研究結果を紹介し参考に資したい。

家兎の過排卵誘起にはPMS製剤より下垂体前葉製剤の方が有効なことが一般に知られているが、筆者が研究をはじめた当初は、下垂体前葉製剤は入手しにくく、市販の製剤では再現性に問題があったため、ともかく入手容易なPMS製剤を主体に過排卵誘起方法を確立することからまず研究をはじめた。この頃丁度、農林省畜産試験場の杉江技官が、牛においてPMSによる過排卵効果が不安定なことから、この改善策として卵胞ホルモン（エストロゲン）を応用する試みを報告していたので、さっそくこれを家兎にも応用することにした。牛の場合の過排卵に対するエストロジェンの応用では、あらかじめ

めエストロジエンを投与して卵巣機能を調整しておいてPMSに対する卵巣の反応を安定させるやり方とPMS処理で卵胞が発育した時期にエストロジエンを与え内的ゴナドトロピンの協同作用で排卵効果をあげるやり方の二通りをためし、後者の方法が効果的とされていた。家兎の過排卵を考えた場合、供試家兎の性周期がつかみにくいため卵巣機能が不揃いのまま処理されることが反応に安定性を欠く一因ともみられるので、前処理および後処理（併用）の両方について検討した。

過排卵処理として日量四〇国際単位（IU）のPMSを五日間、計二〇IU皮下注射し、ついで翌日（二十四時間後）、交配と二〇家兎単位（KE）のHCGを静脈注射する方法を用い、エストロジエンとしてはエストラジオールを、前処理の場合にはPMS注射開始の七十二時間前、また、併用の場合はPMS注射最終日に、〇・〇五〜一・〇mgを筋肉注射した。その結果、エストラジオール前処理の場合は、〇・一mg以上の投与で、エストラジオールを投与しない過排卵対照より排卵数が優り、最も高い値は一mgで得られた（平均排卵数三三・二個）。一方、エストラジオール併用の場合は、やはり〇・一mg以上で過排卵対照より排卵数が優り、こちらの方は〇・一mgの投与で、すでに前処理の最も良かった一mgの排卵

数より高くなっていた（三七・四個）。この排卵数は、正常家兎の排卵数の五倍も多いものであった。採卵率および分割卵の割合はエストラジオールの前処理および併用区とも、従来の過排卵の場合にくらべて劣るものではなかった。これらの結果から、PMSによる家兎の過排卵にエストロジエンを応用する場合も後処理（併用）が有効なことが判明した。

つぎに、エストラジオールを併用する際の処理方法を若干検討した。すなわち、PMS終了後交配までの間隔を四十八時間おくかたちで、PMS最終日に〇・一mgのエストラジオールを投与する場合と、最終日の翌日投与する場合の二区を設け、前記の交配まで二十四時間おくと比較してみると、四十八時間区は、平均排卵数は二十四時間区と差がなかったが、採卵率や分割卵の割合はあきらかに優っており、とくにエストラジオールを最終日に併用して四十八時間において交配した区は、採卵率八八・三%、分割卵の割合九九・三%と申し分ない成績が得られた。その後の追試でもこの方法は再現性のある方法と認められたので、PMSを用いる過排卵にこの方法を採用することを推奨した。

ここで問題なのは、エストラジオールがどのような作用機構によって効果を発現したかという点である。これを

考察するために、エストラジオールを投与した場合としない場合の卵巣所見をくわしく検討すると共に、両区の卵胞の發育程度を経時的に比較してみた。その結果、エストラジオールを併用した場合、総卵胞数にはさしたる差はないが、卵胞に対する質的な作用が考えられた。これは従来考えられていた内的ゴナドトロピンの協力的な働きというよりは、卵巣に対する直接作用が考えられるが、この点はまだ想像の域をでない。

一応これまでの研究で過排卵に有効な方法がみいだされたので、つづいて過排卵処理の卵巣におよぼす影響を組織学的に検討した。というのは、過排卵処理卵巣をみると排卵点と共に過大卵胞や血胞が多数出現していて、一見異常を呈していたからである。過排卵処理卵巣を組織学的に検索した結果、いずれの家兎の卵巣にもかなり大型の異常卵胞がみとめられた。異常卵胞は、きわめて大きな囊様卵胞と卵胞腔内に出血をとまっていたいわゆる血胞にわけられ、大部分は血胞が占めていた。血胞は顆粒層が消失したいわゆる囊様血胞が大半であるが、そのほかに顆粒層が剝離しない初期と思われる血胞、黄体化をとまなかった血胞、萎縮をはじめた血胞なども散見された。このように過排卵処理卵巣にみられる異常卵胞(主に血胞)は、排卵数の増加を妨げる原因であると共に、処理

後の妊娠が正常に起りにくい一因とみられている。血胞の存在と妊娠の因果関係はともかくとして、処理により誘起された血胞がどの位の日数で消失するかしらべてみると、処理後三十日ではまだ血胞は多数存在するが、五十日ではほぼ消失することがあきらかとなった。以上の観察は不妊家兎でなされたが、もし妊娠家兎においてもこのような経過をとるとしたら、妊娠維持に障害をもたらすことは想像にかたくない。

過排卵誘起を研究用の卵子生産に応用するにしても、処理後の妊娠を検討する上でも、過排卵卵胞が正常な経過をとって生殖管内を移動し、正常な発生がなされているか知ることは重要である。そこで、卵子の移動や分割などを検討するための前提条件となる排卵時間をかわきりに、受精能力保持時間、卵子の移動および分割進行程度などを過排卵処理家兎についてしらべてみた。その結果、過排卵処理家兎の排卵は、交尾後九時間で一部に開始され、早いもので交尾後十四時間、遅くとも十五時間で終了することがあきらかとなり、開始時間は正常家兎と変りないが、終了時間はいくぶん遅れていることが判明した。過排卵処理家兎卵胞の受精能力保有時間は、HCG注射後十二時間までに交配しないと高い受精率が得られないことから、推定六〜八時間ぐらいと考えられ、これは正常家兎の場合と変りないことが知られた。過排

卵処理家兎の卵子の移動は、正常家兎にくらべると半日ほど早く、交尾後七十二時間で子宮に入っていた。また、卵子の分割進行は、ほぼ正常な経過をとり、交尾後八十四時間以降正常な胚盤胞として存在した。これらのことから、過排卵処理は、排卵時間や卵子の移動にいくぶん影響を与えているが、子宮に入った胚そのものは正常なものであると考えられた。

このようにいくつかの観察を行なう一方、過排卵を応用して家兎の産子数を増加させるための実験も試みた。まず最初にPMS処理ならびにPMSにエストラジオールを併用処理する家兎について、交配後十一日に開腹検査を行ないその後縫合して分娩にいたらせる方法で、妊娠率、着床数、分娩率、産子数などをしらべた。その結果、PMS処理区では供試し九例のうち妊娠していたものはわずかに三例(妊娠率三三%)で、それらの平均着床数は一〇・〇(いずれも生存胎児)と低いものであり、しかもこの三例はいずれも分娩はしなかった。PMSにエストラジオールを併用した区では、十八例のうち十一例(六一%)が妊娠し、平均着床数は一〇・五(うち生存胎児七・四)で、分娩にいたったのは十一例のうち二例(一八%)、産子数一〜四匹であった。この結果から、妊娠率、分娩率は後者の方がいくぶんよい成績ではあったが、過排卵処理家兎の着床や妊娠維持はきわめて困難

なことがうかがえた。

この原因としては、前述のいくつかの観察から卵胞側に支障がないとみられるので、おそらく、処理卵巣の内分泌異常、とくに卵胞ホルモンと黄体ホルモンの不均衡か、黄体ホルモンの量的不足にもとづく子宮の着床条件の不備が一因と考えられる。そこで、処理家兎の黄体機能を内的に亢進させ黄体ホルモン優位に改善しようとのねらいで、ケツ歯類に黄体刺激作用が証明されているプロラクチンを、過排卵処理家兎に交配後投与する実験を行なった。その結果、交配後一〜五日に合計二〇〇IUまたは交配当日から隔日に五回合計一〇〇IUのプロラクチンを投与したグループで、妊娠率七八〜八〇%、平均着床数一八・〇〜二〇・七、分娩率七五〜八六%と高い成績を得ることに成功した。しかし、産子数は二〜一〇匹と正常の範囲で、初期の目的は達成できなかった。

以上は筆者が表題に関して行なってきた研究の概要である。これらの研究はやと過排卵処理後の妊娠を可能にしたにすぎず、今後に残された問題の方が多いことはいうまでもない。ともかく、諸先生の鞭撻と研究室の学生諸君の協力があってここまで研究がすすめられたことに感謝している。ここにのべた内容の詳細は、家畜繁殖研究会誌十九巻二号に印刷されているので参照されたい。



## 家畜の育成にあたって

畜産一年 吉安 二郎

最近の畜産において、多頭羽飼育や管理の省力化としての機械化のみが推し進められています。

確かに多頭化飼育等は生産を高めるのに必要かもしれない、病気になることも気ずかなかつたり、又伝染病も広がりやすいという状況を作っています。

そこで、個々の家畜の管理が十分できる範囲の頭羽数で飼育し、個々の家畜の能力を高めることにより生産を高めるといふ方向に持つて行く方がいいのではないかと

思う。それには個々の家畜をよく観察し、何を要求しているかを理解することが個々の生産能力を高める上で最も重要であり、そうすることによりすぐれた家畜を作ることができ、又よりすぐれた子孫を作ることができるのです。すなわち、育種というものは、飼育・管理し、その生産でもって生計を立てている農民が行なうものであり、又、行なうことができるのです。ただ単に家畜の遺伝性を追いかけて、あれこれの家畜を交配している試験場で

の育種は、本当の意味での育種ではないと思います。家畜にしろ農作物にしろ環境条件がその生物の生産性に大きな影響を与えているということを忘れて育種をやっても意味がないのです。すなわち、試験場で育種を行ない、農民がそれを受けとり栽培飼育しても、いくらすぐれた品種であっても、育種された場所、試験場と同じ条件でないかぎり、一〇〇%能力を出すはずがありません。

農民はただ単にすぐれた品種だからというだけで取り入れるのではなく、自分の農地の条件をよく調べてから取り入れるか入れないかを決めるべきであると思う。又、自ら自分の土地の条件を見て、いかにして生産を高めるかを考える位いの努力はするべきだと思う。農業はうけ負い主義的にやるのではなく自ら家畜あるいは農作物に対して働きかけ、生産力を高めるようにして、生物も飼育栽培方法も共に発展させていくべきであり、又そうすることが本来の農業の姿ではないでしょうか。

繰り返えしいえば、育種は栽培飼育と共に行なわれるべきであり、現在のように、育種は試験場、栽培飼育は農家というように別れていては、育種も栽培飼育も共に発展するのはむずかしいのであります。

育種についてはこれくらいにして、どういう家畜がよいかといえ、まず、その根本は健康な、すなわち新陳代謝が盛んで、エサをたくさん食べ、そしてよく消化し

栄養を十分にとり入れることのできる丈夫な胃腸を持つた家畜といえます。

では、どうすれば丈夫な胃腸を持つた家畜を育てるのかといえ、やはり、幼畜の時の育て方が最も重要であり、よいエサやエサの与え方、収容方法も重要な要因になります。

生物は若い時ほど環境条件の影響を強く受けます。そして、適応する範囲も広いのです。だから、家畜でも農作物でも幼い時の育て方が、将来の生産力を高めるか否かという重要なポイントとなります。

幼い時の育て方には、ソビエトのカラヴァーエボ種牛場で行なわれた「子牛の寒冷飼育」や日本ミチューリン会の会員がそれを基にして考案した「寒冷育種」等があります。これは家畜が生まれるとすぐに寒い環境と幼畜自らとたたかわせることにより、その環境に対する適応性を作るのです。又、寒い所では多くのエネルギーが散るので家畜は栄養を取り入れ新陳代謝が盛んになります。その結果、エサをたくさん食べるようになり、それに応じて胃腸の消化吸収がよくくなります。

このようにして、幼畜の時に新陳代謝を盛んにさせ、エサをよく食い、消化吸収のよい丈夫な胃腸を作ること、は、大きくなってからの生産力を高める上に重要であり、また、りっぱな子どもを生む上においても重要だと言えます。

今まで育成についての考え方と方法の一部、簡単に書いてきましたが、実際行なうとなればもっと他の要因が多く入ってきますが、行なうにあたって重要なのは、やはり、行なう場所の環境と、幼畜の育成と、エサの問題です。そして、生産を高める、すなわち二十頭の乳牛でも三十頭分の生産を上げるという方向で行なうべきであり、またできるんだという意志で行なう必要があります。

そうしないかぎり、日本の農業の真の発展はありえないのではないかと思います。  
(参考：よい家畜をつくるために)

## 日本農業の自律性

畜産二年 上山 定利

私が中学時代でしたか、鶏豚について言いますと、特に豚では粕を主体にする経営から濃厚飼料「購入飼料」が気に入られて、安価と普通の農家は日中は畑仕事をやってた為か時間の省力化の為もあるでしょうが変えられました。

この時は今日のようにアメリカその他の輸出国の、飼

料原料である大豆麦などタンパク物質が、輸出制限が起ころと思わなかったのではないのでしょうか、又日本の特色の零細農業の欠点が表面に出て来たようにも思われます。いずれにしても現時点では知ってのとおりにも思われます。考えて見ますと日本はアメリカを主として各国、農産物、食料など半分以上を輸入している状態ですから起ころの当然だったのでしようが、これが私は政策の農業に対するルーズさから生じたと思われるようです。又、前の輸入国のアメリカに対して義理立てしているのか知れませんが、この所が不思議でなりません。それよりももう少し自給性のある国に政策を向けた方がよいと思います。企業委託農業でなく農家自態考えてもらいたいものです。世界的に肉の需要が急上昇に上っています。日本人が肉を多く食べ初めたと言われてましたが、そんな小さな事でなく人口の急上昇が一番問題ではないでしょうか、日本では利益追求、物価安定の為、外国進出を行って、でもいざ日本進出によってその国は自国が自国の供給が低下して物価高を来たらし批判されません。現時点でもう生じ始めています。今のような利益追求の時は言いですが、これが自国の為の利益を追求と共に食糧確保だった昔ならともかく今日では危険な状態ではないでしょうか、これも心配ですが、それよりも才一に前記したように農家自態に向けると言うことはせめて食糧でも飼料作物でも自律体制を強張しなければなら

いのではないのでしょうか？たしかに多少問題はあります。国土の狭いと言うことです。今の企業農業経営全部が自給体制に入るとしたら不可能に近いでしょう。でも私が思うには少しの余地はあるように思われます、中小企業は特に考えなおす必要性があるのではないですか？又、家畜の飼料効率はもう限界に近いのではないのでしょうか？そうなるというくらい強いてもけつきよく飼料のコストをいかに低くして経営を行なっていくかが問題に成るのではないのでしょうか、このように不安定な購入飼料では又一つの今日の離農にも影響しているのではないのでしょうか、本日に一番確かな自給が必要になってくるのではないのでしょうか、豚などは牛のように広い草地が必要でなく要求率もよく歩留りも六十五パーセントまでは行きます。全般的にはすこしでも良いのではないのでしょうか？最後に私が田舎に帰る時、昨年までの米の生産調整で原野となった水田が多く見られます。又土地の高価もあるでしょうが、スキ・カヤ類がわずかにのびた、昨年まで生えていた稲が小さくなって立っています。本日に世界では必要以上に又身近なアジアでは食料不足しているのにさびしいものです。この土地を危機にふんした国の人が通つたらどう思うのでしょうか？本日に一言を言えなくなるように思われます。このように、農業再起が必要ではないのでしょうか、日本人はあまりに経済社会におぼれすぎたのではないのでしょうか、金銭にしがみつかないで日本の

農家の昔、未来を一通り見なおして反省したいように私は思いました。

## 実践家畜生理の神秘

畜産二年 小川 保

私の家は酪農を始めて二十年、今ようやくその面白さを味わっている所である。この手で種付をし、この手で妊娠を知り、この手に注射器を握る毎日、こうして幾月も幾月もそして幾年も過ぎて行く間に、私は色々と面白いことに気づき、又面白いことを体験して来た。

まず才一に牛に粗繊維の多い粗飼料を給与すると牛体内に存在する蛋白が増加して中には蛋白過剰症を起こす牛さえ見える。この原因を追求してみると、誰しもが知っているように牛の才一〜三胃までは微生物がいる。そしてこの微生物は粗飼料の繊維を分解し、畜体が利用できるようにできている。しかしこの微生物も食物と共に才四胃に運ばれ胃液の作用により殺されてしまう。そして小腸においては遂に分解吸収されてしまうのだ、それも単なる栄養分としてではなく重要な動物性蛋白質として、

要するにデンプン質飼料である粗繊維を多給することによって蛋白が増加するという、この神秘がおわかり頂けたらどうか。

畜体内で行なわれるこの微妙な変化は飼料計算に誤差を生じさせ、遂には家畜の健康を害するまでに至るのである。

次に述べることは産後の後産停滞を少くする方法であるが、これはホルモンの生理作用を知っている人なら誰でもわかる簡単なことである。

まず、どの家も分娩がすめば初乳を搾るだろう、しかしこの場合、初乳を搾る場合、分娩後六〜八時間後にしてもらいたい。それだけでいいのだ、それだけで後産停滞が起ころ割合が確実に低くなる。その理由は後産を排出させるための子宮筋収縮ホルモンと搾乳をする時に分泌される乳汁下降ホルモンとがオキシトシンという同一のホルモンだからである。

このように酪農あるいは畜産というものはそれを追求していく上において無限の深遠性を秘めていると私は思う。そして私は至らずともそれら一つ一つを発見し応用し利用して行くのが我ら農学徒としての、そして酪農家としての使命であると思つてゐる。

## 『憂鬱な私の動物観』

畜産二年 朴 念 人

私にとっての動物観とは、それは私にとっての人間観にも通ずる重要な課題であった。そしてその観念は私のこれからの態度を決定する上での大きなファクターとなるものであった。そしてこの事が私には、畜産を学び畜産を行なう上で大きな障害となってきた。というのは、我々人間が動物を管理するということについてであった。そしてその目的についてであった。

一口に目的といっても、それは互いにまったく相反する二つの目的で行なわれている。簡潔に言えば、一つはペットとして、人間の目を楽しませる為の動物の飼育である。もう一つは、人間の生活の為に殺すことを目的として飼育するという二つである。

私にとっての障害とは、人間が他の生き物の自由をうばい、自分達の都合の良いように飼育してしまうことについてである。私にはこのことに人間の醜いエゴイズムを感じずにはいられなかった。人間を含めた自然界の生き物にとって他を殺傷することが良いことだとはとても思えない。又、動物は人間に利用されることが本来の生

業だなどとわり切れるほど悟りも聞けてはいない。

しかし他生物を支配し、そこからの略奪によってのみしか生きられない我々生物にとって、それは宿命的なことである。そして私にはこんなことを考えることこそ人間の思い上りであるように思えてきたのである。他の生命の略奪は自然界のオキテであり、種の保持には最低の条件であったのである。そして私のしようとしていることは、人間の生活の最前線での活動であったのである。

しかし私はここで一つの批判を持った。それは現在行なわれている動物の飼育のもう一つの目的、動物のペット化である。

私は現在の我がクラスの多くの人々が入学時の自己紹介の趣味のところで『動物の飼育』とした人が多かったことを思い出した。彼らは食料供給の為に飼育しているであろうか？

畜産における動物と人間の関係を、動物園におけるそれと混同してしまうことは大きな誤ちである。ペットとしての動物を見て惨めと思う人は少い。しかし多くの人々は畜産動物の殺傷を『かわいそう』という言葉ですます。そしてその同じ口の中で動物の肉を食らう。私はそんな人々を見ると、ぞっとして背に寒さを感じる。

我々の目的とする動物の管理、それはペットの飼育とはまるでちがう。我々もっと冷静に彼らとの関係を見つめねばならない。食料としての動物、殺すことが目的

の動物、それと我々との関係はもっと厳しいものであるはずだ。『かわいそう』『きたない』などという言葉は我々と畜産との関係にとって大きな侮辱ではないだろうか。

私は人間が彼らより高い位にあるものなどとは思ってはいない。それは人も動物も植物も、同じ自然界のサイクルの一部分にすぎないからである。

私は彼らを殺傷する自分を正当化しようとは考えていない。私は自分のしようとするを、きちんとした目的を持って冷静に見つめていきたいと思っているのである。けれど私は動物観を二つ持たねばならないことにさみしさを感ぜざるをえないのである。



# 山地酪農

山地酪農研究会

## 山地酪農について

畜産三年 佐藤久清

我々の山地酪農を研究する会「農大山地酪農研究会」が発足したのは昨年（昭和四十七年）の五月ですから、もう一年半になろうとしています。現在会員は、OB一名、三年二名、二年八名、の合計十一名より成り立っています。ごらんのように、一年生がいなことがこの研究会の唯一つの悩みです。

さて、今年の収穫祭に初めて参加したわけですが、その結果一番多く受けた質問は、「山地酪農とは一口に言って、どういうものですか？」「山地酪農の良い点と悪い点は何ですか？」といったものでした。私は山地酪農を一言で説明することはできません。というのも山地酪農はものすごく深い、巾の広いものだからです。しかし、あえて言うとしたら、山地酪農とは、自然を深く探究し、

その長所をさぐり取って、上手に酪農に生かし、山地で創造的、拡大的な酪農をすることが目標であり且つ、それを行なっている人達が日本全国に、おられるということです。今自然をうまく利用すると述べましたが一例を上げれば、山地酪農では放牧地（牧山）にシバを植えています。牧草の代わりに野草といわれるものを植えているわけです。これには多くの理由が上げられます。先ず牛の好みが良いこと、栄養価に富むこと、春から秋にわたる長い期間の総生産量が多い、草高が低く密生する、生活力が強い、繁殖力が旺盛である、等です。これらの中から、二つほど選び説明したいと思います。先ずオーストラリアにシバが栄養価に富むということについて、シバは主に地下茎で繁殖しますから、地上に出ているのは葉片の部分です。ここでは、光合成が行なわれ、絶えず、炭水化物が生成されていますから、牛は栄養価に富んだ部分のみ食べているわけです。オーストラリアに、放牧地を山に求めていきますから、当然そこには、土壌侵食が起こると考えられます。（傾斜度の問題もありますが）それを防ぐには、地表の土が流れないようにすること。それには、地表の雨水を、流さずに、くい止めることです。この点について、シバは草生密度が高く現にシバ生は、上から見ても土の色が見えません。このようにシバは密にはびこり、多量の雨水も止めておくことができますから、土壌の侵食は完全に防止できるわけです。以上のことから、山地

酪農では放牧地の主体草にはシバが最も良いという決論を下した訳です。

次に採草地の面においても、新しい、意外だと思われることがありますのでそれを簡単に説明します。採草地に従来の牧草（イタリアン・オーチャード等）を播いた場合、四月中旬から、五月中旬を頂点に、ぐっと生産量が伸び、それ以後は、六月下旬まで低下してゆき、七月上旬頃から再び生産量が増えてゆきますがこの季節は夏枯れによる弊害を受け春の生産量以上の収穫は望めません。つまり牧草の場合、春に最高の生産を示し、夏から秋にかけては、ちょっとした生産量しか望めないということです。そこで夏から秋にかけての生産収量を増すにはどうしたら良いでしょうか。夏枯れに強い草はないのでしょうか、ありますか、ありますか。それも、我々のすぐ身近に存在するのです。それは昔から、米作、畑作にとっては有害な雑草といわれて来たノビエ・メヒシバです。これらは、夏に生える草ですから、当然夏枯れにも強く、ちょうど生産量が七月中旬から八月上旬にかけて最高に達し、その収量は、牧草による春の最大よりも高いものになるのです。そして、春の最高生産量は、従来から用いられて来た、北方型牧草で、夏の最大生産量は、いわゆる雑草といわれたメヒシバ・ノビエで収量を上げようというのが山地酪農のやり方です。なお、乳牛の傾斜度への適応ですが、一般に40から45度までなら大丈夫というデー

1が出ています。というのは、30度位の傾斜になると牛は自ら、等高線状に牛道というものをつくり、頂上まで登ることができるようにしてしまいます。以上の他にこの酪農をやるうえでの重要な点とは、放牧地（牧山）の酸性改良をし、土壌を肥やすことです。酸性改良には、持続的効果のある石灰石の屑を用います。また、土地を肥やす為に、二通りの方法を行ないます。一つは放牧地に、採草地や畑から持って来た飼料、あるいは野原に生えていた草を刈って来て補食として与えることにより間接的にその土地を肥やす方法、もう一つは、直接、糞尿を散布するやり方です。もちろん、牛糞尿の他に人糞尿も使用しても良いわけです。なおこれは採草地にも利用する方法です。このようにして、放牧地を肥やし、その養分を吸収して育ったシバは、栄養価も高く、さらにそれを餌とする牛は健康でかつ、良い乳を出してくれるわけです。それによって、経営所得の向上、規模拡大を年々計ってゆこうとし、またゆけるのが、山地酪農です。

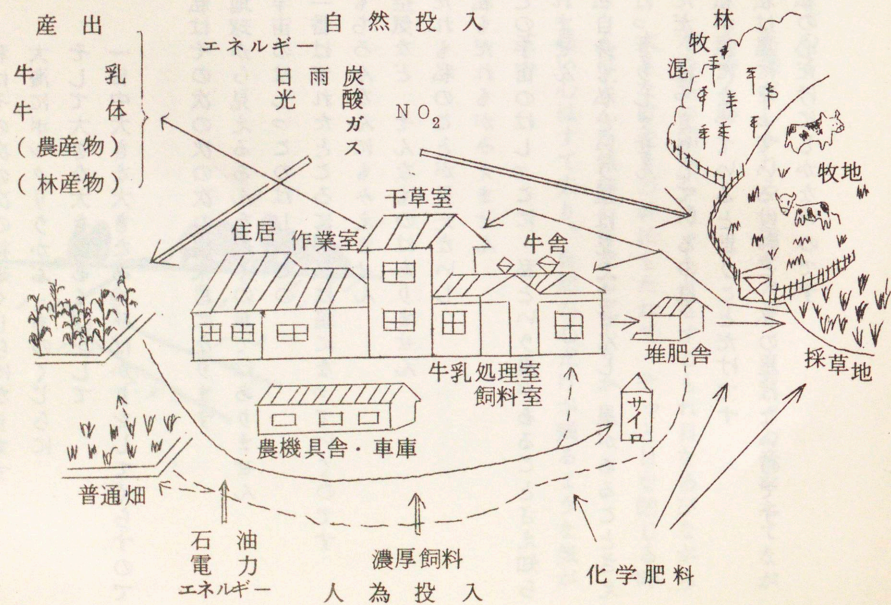
# 山地酪農について

畜産二年 秋元 忍

現在酪農は曲り角にきていますと、畜産に關した本や酪農に關した、機関紙・月刊紙で盛んに謂れています。それは、我国の酪農というのは、濃厚飼料のコストによって経営が左右されるためであると私は思います。我国の山野面積は国土の82%、約30万km<sup>2</sup>、つまり三〇〇万haあるが、このうち傾斜度40度以下は、一五〇〇万haといわれている。しかし、この中で経済的に飼料草の生産ができて、管理可能な面積は七〇〇万ha程度とみられているが、実際にこの管理可能な七〇〇万haがどれだけ活用されているか、それはおそらく1/4程度あるいは、もっと利用されていないのではないのでしょうか？そこで、私達山地酪農研究会ではこの山を利用して、不妊・難産・病氣・短寿命・公害といったものの少ない、酪農を我国全体に普及させようと考えています。皆さんも知っているように、山地酪農とは字のごとく山で酪農をすることである。つまり、山地酪農とは自然をうまく利用して山地地帯に創造性・安定性・拡大性をそなえた農家を創設すること

育成牛の子牛にも搾乳牛にも運動は絶対に必要であることが理解されていないように思う。このように、乳牛飼の誤りがあるのではないのでしょうか？現在の酪農のまだ十分に飼料草を確保していないのではないのでしょうか。乳牛の最良の飼料は草で、草は牛のアキレス腱といわれています。乳牛は35〜45度の急傾斜地でも採食活動を行なうものである。しかし、今の酪農は乳牛(牛)の自律機能を無視しているように思われます。そこでもう一度、私達は原点にかえて乳牛(牛)とはどういう機能を持ち、どういう性格を持っている家畜であるか考えてみたいものです。

山地酪農模式図



を目的としたものである。今後、山地酪農が進展していかなければ、我国の酪農はこれ以上進展していかないのでないのではないかと私は思います。私達の山地酪農とは、山地に放牧地として牧山を作って、牛を放牧する。牧山の主体草は、不断私達が普通雑草(又は野草)として取り扱っている、芝・ノビエ・シロツメクサ・メヒシバ等を植えています。芝・ノビエ・メヒシバは牛の好みがよく、栄養価に富み、生産量が多く、草高が低く、生活力が強く、再生産力強く、生育期間が長く、エロージョンがあり、このように山地酪農の主体草には、飼料草には絶対に欠かせないものがあります。それに、山地酪農の主体草は他の外来の飼料草よりも急傾斜に強いといった特徴がある。その他に牧山には生石灰ではなく、石灰石をいれる。これは酸性土壌改良をするためである。ここで石灰石を入れるのは、生石灰よりもコストが安く、効めが持続するためである。牧山に放牧することによって、畜産公害が減少し、牛のたれる糞尿が土壌に還元されて肥料となるといった二重の効果がある。現在の酪農では乳牛は牛舎内で静かに飼うものではないと思われている。傾斜面の昇り降りなどは乳牛の行動ではないと思われている。運動エネルギーがとられて、乳量が減るのをおそれている。



無題

畜産一年

M・S

私は将来ネコになります  
そこらにうろついている  
ノラネコとは ちがいます  
チンチラネコになります

チンチラネコをご存知でしょうか？  
毛のふさふさとした  
目にアイシャドーをした  
上品で気高いあのネコを  
私は将来そのネコになります

私はその次の将来タカになります  
あのすうどい目を持った  
私はつばさを いっぱいにひろげて  
大空を飛びまわる  
空の主人公になります

私はその次の次の将来くじらになります  
大海にポックリうかぶ あのくじらに  
そして大きな大きなあくびをして  
一日中大きな大きなあくびばかりをしてくらすのです

私はその次の次の将来星になります  
地球から見えるあんな近くの星ではありません  
宇宙のはしっこのはしっこ  
一番はずれたところに 私は星になっていくのです  
もちろんなんにもみえません  
空気など そんなものはありません  
だれも私のことが見えないし  
私もだれもがみえません  
この宇宙のはしっこに 私という星があることさえ知ら  
れません  
私自身も私という星は見えませんが 星があることさえ  
はつきりしません  
ただ はつきりしているのは  
私が星になっていると思うことだけです  
私は星になっているけれど 私の星はないのです  
私の心だけにしかないのです

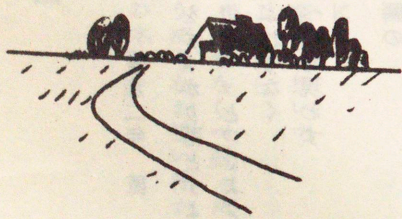
雑感

畜産一年

M・S

その1  
私の中の小さな冬  
それは今ごろ そっと生まれます  
ポケットに手を入れながら  
人通りの少ない裏道を  
ちょっぴり うつむきかげんに歩いていると  
寒さが頬に感じてきます

その2  
ころよい空気を忘れてしまったようだ  
さわやかな風を忘れてしまったようだ  
自然を捜し求めて どこか遠くへ行ってみたい  
独りで ぶらぶらと歩いてみたい  
朝もやの中を 白樺林を  
朝露の残るひんやりとした森の中を  
小鳥に出会い 小動物たちと出合いながら



その3  
落葉がしかれる小道をカサッカサッと音をたてなが  
ら歩く時  
木の葉の間からスーとさすこもれ日をあびながら  
大きなけやきの幹にもたれて そっと目を閉じる時  
人はどんな気持ちになるだろうか  
悪い心はすて去り、自然の心だけが残るような気が  
する

夕暮

畜産二年 匿名 寄稿

夕暮れ時が僕は好きだ  
日没前のひとときが好きだ  
乗合バスで帰宅する途中  
風に流れる柳の枝  
汚なくてボロなアパート  
誰一人待っていない部屋へ  
疲れた足どりで  
人声が遠くでかすかに  
夕暮れ時が僕は好きだ  
日没前のひとときが好きだ

思ひ出

畜産二年 匿名 寄稿

木枯しが木の葉をすっかり落とすように  
停電していた電燈がパッとつくように  
それはなんの前ぶれもなく  
忘却からこの世へ姿を現わす  
速いある日の一瞬の  
不思議にその場面だけ鮮やかに  
なんとはなしに  
なんの意味もなさそうに  
ひとり旅の汽車の窓から見  
秋の山の日の出  
バスの中で隣りに座ったひとの  
ほのかな香水の匂い

特集

LOVE・POEM

貴女

畜産二年 佐野哲史

今 独り部屋にいます  
今 独り貴女のことを想っています  
貴女との楽しかった日々を：  
どこへ行くのも一緒だった二人  
貴女ともう一度あの道を歩きたいけど  
誰かの「彼女お嫁に行ったよ」という話を聞き  
淋しさを押え切れない僕：  
もう二度と会うこともない貴女  
速い速い想い出だけの貴女  
今はただ貴女の幸せを祈るだけ  
今はただ貴女との楽しい日々を  
今 独り部屋で想う僕：



愛しい人

畜産二年 T・H

愛しいあなたよ  
僕にやすらぎを与え  
笑みを与え  
去っていったあなた  
今は顧みて一人淋しく 物想いする  
悲しい別れのはずなのになぜか僕の心は  
明るく澄んでいた  
不思議だ  
別れというのに  
苦しいけれど、楽しい想いで  
僕の「恋よ」さようなら  
初めて会った時 肩をならべ語った二人  
昨日のことのように今なお想い浮かぶ  
ガジュマルの木の木陰

A P O R T R A I T O F  
T H E L O V E

畜産三年 匿名 寄稿

V O L 1

何も知らずに彼女に恋をして  
何もわからずに、彼女と口づけをして  
何も知らずに彼女と別れる

俺は何をしたらいんだらう  
何を考えたらいいんだらう  
雲は空に青い空に何も考えず  
ふらふらとぼっかりと浮んでいる。

俺も雲になってどこかへ行ってしまう  
愛することを、知ったために  
愛されることを知ったために  
愛を求めてしまう俺  
愛に悩むことを知りながら  
雲になって何も考えずに、どこかへ行ってしまう  
青空に浮ぶ雲に……………

V O L 2

九月の最後の夜  
オマエを抱いてねむり  
十月の最初の夜

オマエを抱いて目をさました  
朝、早く起きて太陽をつかまえるんだ  
山の頂上から海の底まで追いかけて

日が暮れて  
夜が肌に冷たくなったら  
オマエはベチカに火をたいて  
しずかに火のダンスを観るんだ

オマエは眠りにおちる  
俺に肩をだかれたまま  
二人だけの夜  
十月最初の夜

Carole King [Rhymes & Reasons] 17

ヒョットしたら、又失恋

畜産二年 匿名 寄稿



V O L 3

十一月の初めの月曜日に、俺は彼女と会った

一言、三言の短い会話

翌日俺は、キャンバスで彼女と会った

そして土曜日デートの約束をして

十一月の二回目の月曜日に、彼女は俺の帰りを待っていた

そしてその夜、俺は彼女を抱いた

その週の土曜日に彼女は、俺を愛してないと言った。

十一月の三回目の月曜日に彼女は言った。

「やっぱり別れましょう」

今日は十一月の四回目の月曜日

俺は一人でアパートに向かう

「雨の日と月曜日は」なんて口づさんで

何かを期待しながら

何も起らぬ 何かを期待しながら

微笑が来て  
その後  
悲しみが来て  
その後  
微笑が仲々やって来ない  
そして、いつか  
再び微笑が来て  
すぐに悲しみがやって来て  
そして、その後には  
微笑がやって来ないような気がした  
それでも忘れかけた頃に  
再び微笑がチラッと姿を見せ  
いつものように悲しみがやってきた  
そして微笑はいつのまにか忘れ去られ  
深い悲しみの底に住んでいるんだらう……………



雑記帳の中から

畜産二年 K・K

野菊の咲く道の語らいにも似た私の心  
あなたに贈った花 クリーム色のバラ  
その花がとても、とても好きだ  
なにも言いはしなかった私  
こまった顔で立っていた貴女

今でも、野菊の咲く道の語らいを想わぬでもない  
始めて女の娘に贈ったクリーム色のバラ  
その香りが、その姿が  
私を夢に、さそいこまぬでもない

しかし、その目覚めに、私は涙を流す  
何も語られはせぬ 二人に

ある、やさしさから

匿名寄稿

なにがある  
テーブルの上に酒のビンとグラス  
幾冊かの本と愛のつづられた日記帳  
あまりつけたことのないラジオ  
整髪料……

手に一本のタバコ  
ポケットの中にマッチ箱と小ゼニいくらか  
胸にかかったハート型のペンダント……

何がある  
私の心に  
むなしさか、悲しさか、あきらめか、喜びか  
それは  
みんな、みんな、うそっぱちなんだぜ！  
何がある、  
私の心に

風の似顔絵より

畜産三年 F・M

VOL 1  
愛をバックの中に入れて汽車に乗ったら  
すられてしまった。  
交番で聞いても  
知らないと言った。  
恋人に聞いても  
知らないと言った。

雑記帳の中から

畜産二年 K・K

VOL 2  
いくつにも飛び散った鏡のカケラに  
映った愛を一つずつひろって  
手のヒラにならべたら  
見えなくなった。



時がたてばたつ程  
貴女が愛しくてたまらないのだ  
こうしている時にも貴女は去っていき  
私の事を忘れていこうというのに  
ウソにも私は、それを望まねばならないのか  
それだけが私に許されているのか  
貴女をつぶらな瞳 小さな胸は  
私の為に痛むべきでなく  
微笑の笑顔にこそ貴女は美しい  
心の安らぎにこそ貴女の微笑は輝やく  
しかしその微笑のまなざしは私の為にはない  
それでも、私は、それを望むという  
それが私の喜びだというのか  
ウソにも、私は……

# 紀行文

## 「ニューオリンズ・ラブソング」

畜産二年 朴 念 人

アルバカーキー発、午前10時30分、ニューオリンズ行、私はこのバスに乗る予定であった。しかし前日の、グラドキャニオンツアアの疲れがでたためか、朝ホテルで目を覚ましたときには、すでに10時に近かった。いそいで出発の仕度をし、チェックアウトをすませたときには、もう10時15分もまわっていた。ホテルの玄関前にいたタクシーに、転がり込むと、「グレイハウンドバスデューボブソーズ」、と早口に言った。ホテルからデューボまでは、タクシーで6〜7分である。私は「ルームサービスを頼んでおけばよかったな」と車の中で考えた。

バスは既に、ロケットのような排気音を唸らせていた。貴重品入りのショルダーバックの他は、全てバスの腹の中に入れてもらって急いでステップを、駆け上った。私はこのバスの最後の乗客らしく、体格の良い、金髪の50

〜60才ぐらいの運転手は、私の顔を見て『OK?』と言ってニコッとした。私は愛想よく『アングト』と言った。実際、私の言葉は『アングト』であった。バスは一層高い唸りを上げて、アルバカーキーのデューボを出発した。バスは、黒人労働者や、外国人旅行者を乗せて、これからニューオリンズまでの、30時間の行程を消化すべく、ニューメキシコ州の州都である砂漠の町、アルバカーキーを後にした。

私はバスに乗ると、すぐ『門』を読み出したのだが、緊張のせいも、少しも頭に入らない内に眠ってしまったようだった。しかし間もなく、運転手のアナウンスで目をさましてしまった。どうやら昼食のストップがらしかった。私が、眠い目をこすりながらバスを降りてみると、外はまるでサウナプロのような暑さだった。どうやら砂漠の中のデューボらしかった。私は急いでカフェテリアに駆け込んだ。内ではツナクラブサンドイッチ、チリピーンズ、グリーンサラダ、そしてセブンアップを取った。日本と違って、ものすごいボリュームだ、だが周りがあまり食べてはいなかったもので、不服ながら、これで切り上げた。食べ終ると私は急に落ちつき、やっと安心できたようだった。私はシャツのポケットにある『ダッチシアーズ』というリトルシガーを取り出した。これは安くてうまいシガーだった。私にはA&Cよりも上に乗った。ブルーのバックから一本、シガーを取り出し、

ゆっくりと火を点けた。私は『こういうゆとりこそ、旅行者には大切だな』などと考えながら灰を落した。……私はこの時、初めて自分が一人の若い女性と向き合っているのに気づいた。私と彼女とは1mも離れていない、私は、自分の食べ方は品がなかったかな?と考えた。そして彼女を窺うように、ちらりと見た。すると、彼女も私を見ていたらしく、互いに目が合ってしまった。彼女は『ニコッ』とほほえんで『ドチラカライラシタノ』と聞き取り易い英語で話しかけてきた。私は慌てて顔を上げ、『カメアリ、トウキョ』と答えた。『エ、ドッコ』と彼女は聞き返した。私は、馴れない会話を、若い女性と交したことに少々興奮きみであった。『ハイ、カメアリネ、ジャバン・トウキョノナカニアルネ』、彼女は『Ohノトオイデスネ』『ジャバンニハイチドイッテミタイハ』と言った。そして『モウバステルワ』と言って立ち上った。

驚いたことに、彼女は私の隣りであった。しかも私は厚かましくも彼女の肩に依り掛かって、寝ていたようなのである。しかし私はこの時から、もう彼女とうちとけてしまった。互いに一人旅の気楽さと、開放感の為だったのだろう。ニューオリンズまでは、また24時間以上ある。日本では考えられない、バスの旅である。彼女はスペインから来て、サンフランシスコ大学で一年間、音楽を学び終えて、これから、自分の国へ帰ると

ころであった。スペインでは、国立の音楽学校に在籍していて、今21才だという。彼女は私の身振り手振りの会話を真剣に聞いてくれて、わかり易い、易しい英語で答えてくれた。私が話すとき、彼女の青い目は、私のへたな英語を理解しようと、じっと私の目に向けられた。我々の会話は、のろのろと、あちこちつまづきながらも、確実に進んでいった。3時間ごとのストップには、バスを降りて必ず食事をした。彼女は私と話すとお腹がすくといって笑った。そしてよく食べた。私は彼女以上に食べた。話して食べて、そして又話した。

『ワタシハニューオリンズヲミテカラ、エアーブレインデスペインニカエリマス』  
『ボクモニューオリンズミルヨ』『1〜2ニチイルツモリ、イッシュダネ』  
『アナタハドコニトマリマスカ?ワタシハマダキメテナインデス』

『ボク、ドミニカンカレッジノリョウニトマルヨ、キミモクルイイヨ』  
『ソコハオイクラカシラ』  
『イッパク4ドルネ、タイヘンヤスイヨ、ガクセイダケネ、ガクセイシヨアルカ?』  
『エエアルワ、ワタシソコニトマレルカシラ』  
『ボクニマカスイイヨ、ナントカスルヨ、ダイジブダイジブ』

バスは砂漠の一本道を走って行く。四方何もない。あ  
るのはただ砂と岩だけ、砂漠の陽は肌に痛いほど強裂だ。  
しかし夜ともなると、急に冷え込み、半袖ではいられな  
い。私たちは、夜、彼女の持っていた毛皮に二人で、く  
るまった。彼女の、日に焼けた、小麦色の肌を肩に感じ  
ながら、私たちは砂漠の星を眺めていた。彼女は何やら  
私の知らない歌を口ずさんでいた。

『ソノウタナニカ』

『コレ、ワタシノツクッタウタヨ、コレスペイン語ノ  
歌詞シカツイテナイノ』

『ソウ、イツツクッタカ？』

『イマヨ』

『オオ、アナタウタツクル、テンサイノコトヨ』『タ  
イトルハナニカ？』

『マダツケラナイハ』『イイノガアッタラ、アナタツ  
ケテクダサラナイ』

『OK、ボクイイタイトルツケルヨ、モスコシマツヨ  
ロン』

私たちは、多くの黒人、ヨーロッパからの旅行者、ア  
メリカ人らしき老夫婦、そして、メキシコ人の親子等々  
の中で、二人の、アメリカの中を旅する外国人として、  
暖く、やさしい眠りについた。

朝はまだ明けていなかった。しかし、東の方向なので

きな乳製品は豊富だし、パンもうまい。日本食など少し  
も食べたくなかった。こちらで会う日本人は皆、すし、  
すしと騒ぐが、私はそんなものは欲しくなかった。ハン  
バーガーとコーラで充分幸せになれた。

午後四時だというのにニューオリンズは焼けるように  
暑かった。白い道がまぶしく、サングラスなしにはとて  
も歩けない。私たちはニューオリンズのデューポの前に  
あるサークルからストリートカーに乗った。このストリ  
ートカーこそ、私が夢にまでみた『欲望』であった。彼  
女も何やら感慨深げに『欲望』から外を眺めていた。こ  
の『欲望』という名の電車』が走るセントチャールズアベ  
ニューは、百年ぐらい前のまっ白な、破風のある洋館が、  
今だに残されて、並んでいる。まるでお伽の国に來てい  
るようだ。ブロードウェイにあるドミニカンカレッジに  
は20分ほどで着いてしまう。このカレッジの寮が、その  
日から我々の住家となった。言葉の達人な彼女は、手早  
くチェックインを済ませ、一つの鍵を私に手わたして言  
った。

『ココハ二人で一室ナンデスotte、ダカラ一室デスマ  
セタワ、ゴメイワクデシタカシラ？』

『オーノー、ソナコトナイヨ、ワタチ、トテモウレ  
チイアルヨ』

私はまったく自然なままに、絶対自然なままに笑った。

あろう砂漠の一方向はすでに紫色に色づいていた。私は  
無理な姿勢で寝ていた為か、眠りが浅く、いつまでも、  
寝惚けた頭はさえないかった。彼女も目は覚めていたのだ  
が、私と同様完全には目覚めていないようだった。そう  
するうちに、陽は砂漠にその一片を現わした。アポロン  
は、徐々に燃える車輪を転がした。辺り一面のオレンジ  
色、そして金色に輝く砂、大気はピンクに染り、真にそ  
こには神々がいるようだ。そして彼女の朝陽に輝く目覚  
めの顔はビーナスのようだった。私たちはその朝陽の中  
でうっとり肩を寄せ合った。明方はまだ寒い。車輪は  
完全に地平線を離れ、独自の円を空に描いた。その眩し  
さに私は目をとじた。臉にはまだ陽が輝いていた。そし  
て私はそのまま目を開けずに再び、眠りの中へ落ち込ん  
でいった。

目が覚めると、砂漠の太陽は熱気を取り戻し、全てを  
焼き尽くすかのように頭上で燃えていた。運転手は『ル  
イジアナニ入ッタノデ、アナタノ時計ヲ一時間オクラセ  
テ下サイ、又コレカラ先、ジョージアマデ禁煙デス、朝  
食ストップハ30分間、9時マデデス、サンキュー』と車  
内アナウンスを行って、ルイジアナのオ一番目のデュー  
ポに着いた。私たちは、朝食にチョコレートケーキとブ  
ラックのコーヒーを注文した。朝から甘いものなど日本  
では考えられなかったが、私はもうこの習慣に慣れてし  
まった。私には食事で困ることなど一度も無かった。好

室は一室であったが内は簡単な仕切りがしてあった。シ  
ャワーは別々に取りつけられていた。アメリカはブライ  
バシーを大切にす国なのである。私は旅の垢を落すべ  
く、シャワーを浴びた。隣りでもシャワーを浴びる音が  
している。彼女は自作の歌を口ずさみながら、私に今夜  
の予定や、食事のことなどを聞いた。しかし私は疲れて  
いる為か半分も聞きとれなかった。私たちはとりあえず  
六時まで休み、それから食事をして、バーボンストリー  
トへ行き、そこで本場の黒人音楽を聞くことにした。

ニューオリンズ、そこはアメリカの中の京都、と日本  
人が良く言うように、ボストンと並ぶ最も古い都の一つ  
である。南北戦争以前には実質的な南部の首都であつた  
ところだ。ここは開拓時代、フランスからの移民によつ  
て建設され、今だに二百年前の姿を随所に止どめている。  
誰よりも新しい物好きのアメリカ人が、その進歩の足を  
止め、自らを振り返って見る時の、もう一人のアメリカ  
人を発見できる町である。バーボンストリートの観樂街  
を中心に、ロココ調の建物が並ぶ、華やいだ、そして又、  
落ち着いた町である。そしてこの町は、サッチモヤニ  
ューオリンズブラスバンド、そしてMJQ等を生んだ、ジ  
ャズ発生の地でもある。鎖と鞭と、そして血と涙から生  
まれたこの黒い芸術は、私の心を捕らえずにはおかない。  
テネシー・ウイリアムズの名を世界に轟かせた『欲望  
という名の電車』の全編に流れる、もの悲しいブルース

の音色は、黒人のみならず、我々アジア人の涙をも流させる力を持つ、そこには抑圧された人間の魂の叫びと泣き声、葬式にさえ踊り狂うその力は、ベットを、サックスを、ピアノを、ドラムスを、そしてベースを、うちならし、唸らせる。そうした音楽に色どられたこの町のでき事の一つ一つを、ミシシッピーの曲りくねった流れは二百年以上の間、見つめ続けてきた。そしてこれから先、永遠に見つめ続けるだろう。

私たちはレストラン、トウシスターズでフランス風の海の味をその夜味わった。ジャズ、ブルース、ソウルミュージック、ロック、それらの音楽は、バーボンストリートを歩く私たちをつつみ込む。この観衆街で私たちは他のあらゆる外国人と同様、一組の外国人のカップルとして、この喧騒の中にとけ込んでいった。ここに朝は来ない。昼の如何なる恥辱をも照らし出してしまふ情無用の太陽はない。酒と歌と陶酔、着飾った黒人の強烈なダンス、人々はここで原始に戻る。

ミシシッピーの堤へはここから五分とかならない。暗やみの中で、サザ波が堤にあたる音が低くひびく。河はまっ暗に、大きく包み込む。対岸のハイウェイの光の列、その下を、次から次へと流れるライトの群れ。これらは足もとの、風にゆれる波の音と妙に溶け合い、ざわめく町からは教会の尖塔が、光に照らし出されている。終夜運転のストリートカーはその名にふさわしい唸き声を上

げて走り去る。

私たちは黒く流れるミシシッピーを前にして、サザンコンフォートの心地良い酔に体を任せている。彼女は例の歌を口ずさんでいる。私たちは、トムソーヤを冒険に駆り出した、あの勇気の源であるミシシッピーの魔力の中に体を委ねていった。

ニューオリンズの朝は小動物のものである。私たちは朝のさわやかな空気の中で朝食を取りたかった。アウドウボウボンパークはカレッジの寮から二三分の所に在る。日曜はすべてのストアーが閉ってしまふ為、私たちはサンドイッチ用のパンとフルーツ、フライドチキン、そしてコーヒーを自動販売機で買って、アウドウボンパークへ朝のピクニックに出かけた。そこはかなり大きな公園で、中にはゴルフ場もあるようだった。私たちは大きな木の下でさわやかな宴を広げた。ピンクやブルーの名の知れない花々の中で。リスや小鳥は、すぐ目の前まで来て、宙返りをして私たちを迎えてくれた。まるで夢のような朝食である。彼女は例の歌を口ずさみながらサンドイッチを作っている。コーヒーの素敵な香りは辺りをつつんだ。

『ワタシ、コノ歌ニタイトルヲツケタノ』  
彼女はにこやかにほほえんで言った。

『ドンナタイトル？』

『ニューオリンズラブソング、スコシモ合ッテイナイケド、コレニシタイノ』

『ステキナタイトルダ』

私は彼女の真似をしてその、『ニューオリンズラブソング』を口ずさんだ。今の私たちには何の壁もない。言葉の障害などまるで感じなかった。彼女は私の目から、私の言おうとすることを理解した。私も彼女のその青い目から、彼女を理解する。ささやかなコミュニケーションではあったが、私たちにはそれで充分であった。

静まり返ったニューオリンズの日曜日を私たちは町の人々と同じように静かに過した。真白なフランス風のアルバルトマンの前では、老人達が、午前の陽光を浴びて、座っている。彼らは私たちにさえ、気安くワインクする。私たちは、もうこの町の恋人同士のように気ままに、笑いに満ちた時を過した。

その日の夕方、私たちはこの町に古くからあるスイングジャズ専門の店に行った。そこは私の旅行の目的の一つでもあった、ブリザベーションホールというレコードも出している店である。店は古く、つぎはぎだらけの木造で五十人も入れれば満員になってしまう。すりへった木の床に五、六台の背もたれの無い木の長椅子がおかれ、その他には何もない、殺風景な、倉庫のような所だった。しかし客は多く、常に百人くらいは入っているようだった。そして驚いたことに、門の横では、日本人の女性が

入場者から金を取っていた。彼女は私の顔を見ると『今夜はキッドトーマスがメインよ』と言った。『おお、さすが』と私は彼女に返事をした。開始までにはまだ十五分くらいあるようだった。そして私たち三人はその十五分間を日本語と英語のゴチャ混ぜの会話で過した。

彼女は夫と一緒に日本でジャズをやっていたのだが、日本ではスイングでは食えないので、ここに来て働いているのだそうだ。彼女はバンジョー、そしてだんなはドラムスをやっているとのことだった。奇妙な会話であったが、私には一週間振りの日本語だった。

すでにホールは五十人以上の人々が詰まっていた。彼らの半分以上は白人の男女であった。年配の人もかなり集っていた。軽快なジャズの音が聞こえてくると、皆はまったく楽しそうに、ある人は足で、ある人は指で又頭で、調子を取りだす。キッドのソロが始まると、ホール一ぱいに拍手と歓声が沸き起る。バンドと客は同じ高さの床で接し、そしてその間は一mも離れていない。人のよさそうな、楽器を操るバンドマン達は皆六十才を超えている。キッドはすでに今年七十二才になっているそうだ。しかし彼らの衰えを見せない演奏は、集った人々を心からシビレさせた。まったくこの人々は陽気にジャズを聞く。ジャズと遊んでいるようだ。私たちは二人共周りの人々と同じように、軽快なリズムに乗り、手を打ち、口笛を吹き、足をふみならした。まさにこれがジャ

ズだった。どんなに悲しくとも、ジャズは涙をゆるさない。体が独自でスイングしてしまう。演奏だけではジャズではない。聞く人々がいて初めてジャズになる。そして演奏者自身も自分の音に酔いしれている。私たちは何もかも忘れてしまう。自分が誰なのか、今何処にいるのかも、そしてホール全体が、ホールの前にいる人々も全てがジャズの中にとけ込んでしまう。

私たちがブリザベーションホールを出た時はもうすでに九時を過ぎていた。サマータイムだとはいえ、もう辺りは真暗で肌寒い。喧騒の後はいつもの何かの悲しくさびしい。夜のニューオリンズを私たちは黙りがちに歩いた。しかし二人の沈黙は、それだけではなかった。彼女にはニューオリンズの夜はもうゆるされていなかった。彼女は明日の午後二時の飛行機で、スペインに向って発たねばならないのだ。私は懸命に何かを言おうとした。しかし何を言っているのか私にはわからない。私たちは静かな食事を終え、人気がないストリートカーに乗り込んだ。

旅立ちのしたくは十二時前には全て終わった。二人にとっては最後の夜だった。私は羽田で買って、まだ手をつけずにあるブラックラベルを取り出し、紙コップとコーラのひとびんを、そなえつけのテーブルの上において、彼女を境越しに呼んだ。

『ブラックラベルがアルケド、ノマナイカ』

から、ラジオを聞いていた。パバワズローリングストーンからBBキングのスリルイズゴーン、そしてスティビー、ワンダーのサンシャイン、聞いたことのない女性ボーカルの低音のブルース、そして私の大好きな、ブルックベントンのレイニーナイトインジョージア、私はこれを知ると飲んでなくとも涙がこみ上げてきてしまう。まったくいい歌だ。ここで聞くとなおさらだ。時計はすでに二時をさしていた。私はふらつく足をひきづりながら、彼女の横へ潜り込んだ。彼女のやわらかな暖かさが私からだをつつみ、その夜の冷たさから私を遠ざけていった。二人のニューオリンズの最後の夜は、心地良いスコッチの酔いと、やわらかい肉のあたたかさと、明日の別離の悲しさを、冷たい雨につつんで過ぎていった。

雨は十一時になってもやまなかつた。私たちはベッドの上で、チャスナツクッキーとコーラの簡単な朝食を済ませて、十一時半にはチェックアウトをしました。タクシーを小雨の中でつかまえて、二人でバスのデューボへ急いだ。私はそこで、ニューヨーク行の四時発のバスの手続きをした。私は荷物を、デューボのコインロッカーに入れて、私は彼女の荷を半分持った。そして再びタクシーをつかまえた。

ニューオリンズのインターナショナルエアポートまでは車ならそれほど遠くはない。近代的なターミナルは雨

『エエ、スグイクワ、ソッチハ寒クナイ』  
『ウン、少シ寒イ』

彼女は薄く化粧をして私の方にやってきた。私は彼女の化粧がとても嬉しかった。彼女に『コーラハ？』とたずねると、コックとうなずいて、私のベッドに座った。私は半分ぐらいスコッチの入ったコップにコーラを注いだ。琥珀色のスコッチは、たちまち泡をふき上げ、みるみる黒くなっていった。私は自分のコップにはスコッチだけを入れて、目の前に差し上げた。そして彼女の目を見て言った。

『フタリノ健康ト、ソシテ……』

『ヘイワトソシテ……』

私は思い切って言った。

『ラブノタメニ』

彼女はまったく嬉しそうに笑った。そして私もあわせにほほえんだ。しかし彼女の目を見ると何も言えなくなってしまう。彼女の目に私は何も答えられない。外は雨が降り出したらしく、夜をいっそう冷たくした。私はスコッチを飲み続けた。彼女も飲んだ。私はリトルシガーに火をつけて彼女に渡し、自分のシガーにも火を点けた。そなえつけのラジオをニューオリンズのステーションに合わせるとテンプテーションズがかかっていた。彼女はもう酔ったとみえて、『ソウリー』と言って、そのまま、私のベッドに横になった。私はスコッチを飲みな

にぬれて河畔に建っていた。大きな待ち合い室はいろいろな国の人々でいっぱいだった。彼女は赤く腫らした目で、私を精一杯見つめていた。今の私には彼女を見つめることしかできない。日本からの一人の学生旅行者に、これ以上の何ができようか。私たちにはあまりにも障害が多すぎる。彼女は他の乗客達と一緒に塔乗口へ歩いた。

『グラシャス、アイラブユー、決シテワスレマセン、グラシャス、グラシャス』といって、泣きながら何度も何度も振り返った。私ははざかしさも忘れて、

『ラブユー、ミートウー、ケッシテワスレナイ』  
『グッドバイ、グッドバイ』

そうして小声で『フォーレバー』とつぶやいた。

今の今まで、私の手の中には彼女のあたたかな手があった。そして彼女の青い目も、茶色の髪も、小麦色の肌も皆私の目の前にあった。彼女の声はいまでも耳に響いているのに、もうそれらの全てはあの数百年も先にある白い機体の中に入ってしまった。無情な翼は私がいかに大声を上げてても簡単に消してしまふほどの轟音を轟かせている。一人の白い服を着た男が、二本の手旗で彼女を乗せた白い飛行機をあやつっている。機はゆっくりと、滑走路の端へ進む。すると急に機は激しく震るえる高音を張り上げて、猛スピードで私から遠ざかって行った。機首は急に上をむき、そのまま機体をぐんぐん雨の中に引っ張り上げていく。そしてメキシコ湾にむかって、大きく旋回

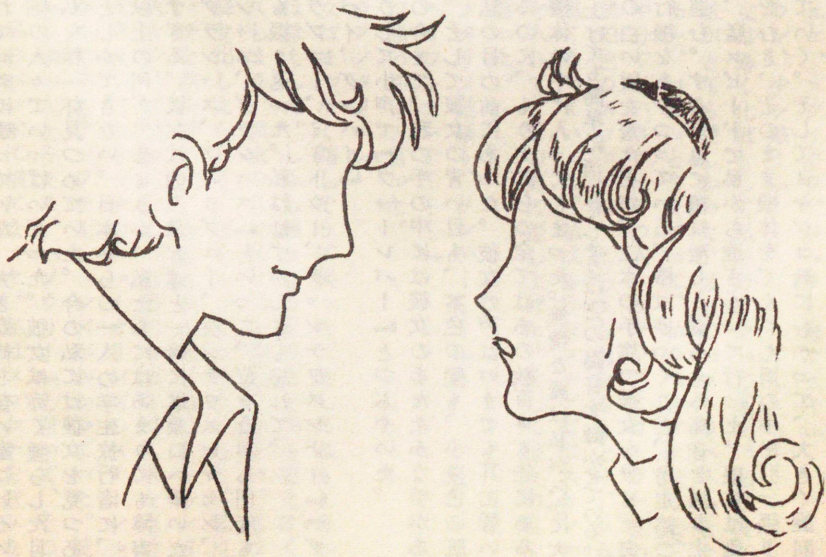
しながら雲の中に消えていった。

私は二時間後、霧の中で、ニューオリンズ発、ニューヨーク行のバスに乗った。もう私は一人の単なる外国人旅行者としてニューオリンズを発たねばならなかった。彼女も今は一人のスペイン女性として機内のシートに座っているだろう。そしてもう一生二度と会えない女性となるだろう。結局私は彼女の住所は聞かずに別れてしまった。

この時私の旅行は半分も終わっていなかった。そしてそれから多くの人々とこの国で知り会った。そして多くの人々と別れた。彼らは今もこの日本の反対側で平和にくらしていることだろう。そして一人の日本人旅行者との出会いも他の多くのことと同じようにその平和な暮らしの中にうずもえて置き忘れていくことだろう。そして私も、日々の生活の中に稀薄していくものと、濃密になっ

ていくものとの、選択を強いらねばならない。  
そして今、私にはもう、あの『ニューオリンズラブソング』さえ想い出せない。

おしまい。



## 随想

### 冬の日の思い出

畜産二年 上山 定利

私が寒い時期によく思い出すのが官崎に居る時の寒い日の登校時のことです。小学校に入った頃でしたが、皆様は官崎と言うと南国と思われるでしょうが私の所は山地で山おろしが吹き大変朝夕冷えこむところでした。ですから朝起きる時に非常に寒いのです。私の家は農家でですから父母は早起きしました。私もよく一緒に起きたその為かも知れませんがすごく寒いもので、朝起きるとすぐ猫の寝ているのを跳除けてコタツに潜り込んでいました。また寒い朝明けに母が火の無い時に自分でコタツに火を入れたのでしようが、その頃の私は気にもしないのでコタツに潜り込んだまま、よく「御飯」と大声で言っていました。今で考えて見ればさびしい話です。そして寒いのに外に出て顔を洗って来て朝御飯を食べる時などは寒いものですからすぐ片方の手をコタツの中に入れて

て食べたりして、後には一口食べては両方の手を入れてしまうのです、ですから母がよく「両手を出して食べなさい」と言われてよく叱られていました。

そして登校する為に戸の外に出ると初めに見えるのが太陽の赤くまぶしく光る光線です。そして牛が、その光りに体を横に向けて鼻から白い粒の息を出しているのです。それで私も一緒に自分の息を出して段々と遠ざかっていって、良く寒さを測りました。今では馬鹿みたいな事ですが……又母がよく「登校時は走って行きなさい」と言っていました。今みたいに車は通らなく朝仕事に行く馬車と車も学校に着くまで三台ぐらいだった。ですから母も安心して居たのでしよう、ですから私はよく走って行きました。その時に霜柱を踏む音がザック、ザックとすると何を思うのか気になります。高さ五センチはありましたか？霜柱は道の中央よりも両外側にあるものですから、わざわざジグザグに走りながら音を出していたようです。又土壁がありましたからよくその壁に、冷たいのにポケットから手を出して霜柱の上部を横に線を描くように動かすと並ぶように落ちるものです。面白いものですか？ついで全部落としてしま……そうすると下に斜面状に積りその積った霜柱は又ますます、本当に針を重ねたように並んでいて白い光を出していました。

その重った霜柱を又強くザクザクッと力いっぱい踏みつけて、あわててよく学校に又、走って行ってました……

学校に着いた時は、霜が靴の上まで来ているものですから、しばらくするとびっしり濡れて冷たかったものです。

下校時にはその朝、踏んだ霜が解けて霜柱は上部に土が着いているものです、朝のように思って踏むと霜はなぐただ黒土だけ残り、土がズボンの裾まで入りよく汚して帰りました……

本当に今で思えばなつかしく思っています。書きましたが、もう二度とこんな事はありません。自然というものは人間の心を深めて行く上に重要な役割を果している事を思いました……



朗 恵

## 研究室だより

### 家畜育種学研究室

家畜育種学研究室は、鈴木正三教授を室長に、田中一栄助教授、渡辺誠喜助教授、天野卓講師（カルフォルニア大学留学中）の諸先生と研究室卒業生による、特別室員、大学院生（7名）及び、普通室員（39名）2年1名1年1名とから構成されている。

研究室活動は、家畜育種の基礎的応用学的学問の追求を広範囲にわたり、そして特に本研究室の特色としては血清学をその方法論として採用している。

このことは、今年の収穫祭において、展示をした「家畜の血液型とその応用」に、表現されている。

さらに毎週の活動として、学生の自主的な考えにより出されたテーマについてのゼミナール、そして談話会で活発な討論が、なされている。

また、年一回の「室報」の発行は、特別室員との交流において重要な活動の一つである。

### 家畜繁殖学研究室

世界的な資源不足が叫ばれている昨今、畜産界においてもこれまで深刻な極面に到達している事はいうまでもない。良質な肉・卵・牛乳等の生産物を市場に供する事を責務とする者にとってその業にたずさわる者は言うまでもなく、その基本的改善を意図とする研究者もより一体化となってその進展をはからねばならぬ時期にまさに直面したと言えよう。

当研究室においては、平林教授が学長に就任されて以来、学生、直接指導は一戸教授、石島講師の手によって行なわれて来た。一戸教授のもとでは家禽の人工増殖、日本鶏・野鶏についての研究、卵質の研究、さらに牛豚などの大家畜を対象とした去勢下における肉質の比較検討、間性豚の研究などが行なわれ、一方、石島講師の指導のもとでは、実験動物（マウス・ラット・ハムスター・兎等）による過剰排卵、過剰妊娠、子宮内転移、体外培養などの研究が卵子の側より追求されている。

研究質のゼミナールは、週一回実施され、その活発な議論に夜のふけるのを忘れる場合も少なくない。しかしながら、動物実験を対象とする我々の研究においては、その材料となる動物の管理、運営は極めて重要な要素であり、また多くの困難を伴う。

先頃行われた収穫祭においては多数の供試動物の展示

を行なったが、これは常日頃動物に接する機会の乏しい都会の子供達に対し、動物の性の知識に対するよき教場となつてゐると自負する次才である。

研究・飼育、当番の他に、室員相互の親睦をはかる行事として、野球大会、その他のリクリエーションが企画され、親睦を目的とした旅行なども行なわれている。

前記のような意図のもとに、我々は指導される先生と共に学び、また討論を行ないつつ、家畜繁殖学研究室を運営しているわけである。

最後に我々の研究室の構成メンバーを紹介して研究室だよりの結びとしようと思う。

室長 一戸健司教授 大学院生 二名  
石島芳郎講師 室員 四〇名

### 家畜飼養学研究室

収穫祭も終わり、現在の研究室は四年生の卒業実験でごつたがえしてあります。毎日々々杉村先生、伊藤先生をはじめとする諸先生の気合と共に……。

わが飼養研は、思うに一風変わった研究室である。今はやりのことばで言えば、個性的な、いや、個性がかなり強い研究室である。杉村教授、伊藤助教授の指導方針もおおかた、その個性の引き出しにあるのではないかと、

我々室員は思うのである。とにかく、お祭りが好きなのはかりなので、研究室には、毎日笑いが絶えない。しかし、研究の方も各グループに分かれて、行なっている。今年も、研究室内を二つに区切り、室員の話す場と、実験室とに分け、実験には、取り分け、しやすくならました。

現在の室員数は、杉村、伊藤両先生、栗原、野口、島山の三兄貴と、四年20名、三年30名、一年2名の計57名の大世界です。

総合研究室の一階グラウンド寄りに位置します。飼養研に、ぜひ一度、勉強しに来て下さい。

### 家畜衛生学研究室

本研究室は川島秀雄教授他界後、一戸健司教授を顧問にお迎えし、近江弘明講師、渡辺忠男助手の各先生と学生室員四年生26名、三年生以下17名が一体となり活発なる研究活動を行っている。

家畜衛生は、家畜家禽の生命を脅かす種々の健康阻害因子を除去し、家畜家禽の生命の延長をはかり、健康を増進させ、かつ、生産の向上をはかることが主な目的である。

今日までのわが国に於ける家畜衛生は治療医学の分野

のである。

研究室は酪農・肥育・養鶏・養豚の四班に分かれ、それぞれ各個人の希望するところを選択し研究及び調査等が行なわれています。

研究室並びに各班に於いては、研究・調査はもとより自主ゼミ、コンパを通して三年、四年の親睦も良くはかれ、研究室の和が自負するところだす。

又、研究室活動として毎年、各地方の農村地帯の実態調査が行なわれ、各班毎に農家を調査しその地域に於ける諸問題を追求し、改善点等を検討し前記のごとく、畜産学経営の立場から解明していきます。

今後、農業に於いて畜産の進行に伴ない生じる諸問題を、実践的立場からおし進め、畜産経営の糧とするものであります。

各農家に於ける糞尿処理の様な小さな問題から、今後の日本の畜産に於ける方向と云う様な大きな問題まで一研究室員に提議された問題は、多々ありその意味に於ける、我々研究室の役割の重さをつくづく感じさせられる今日です。

が先行し、健康阻害因子を未然に防ぐ予防医学はやや蛇行の感があった。したがって本研究室は環境衛生、飼料衛生などを含めた幅の広い研究活動を行い、家畜家禽の「健康保持」に力を注いでいる。

主な研究テーマは、家畜家禽の環境衛生について、家畜家禽の各種疾病（ウイルス性、細菌性、内、外部寄生虫）に対する予防法、早期診断法について、ビタミン類の抗体産生に関する研究、家畜家禽の糞尿処理に関する研究などである。また、近江弘明講師、渡辺忠男助手が兼務している本学家畜診療所に於いても外来動物の診療を中心とした各種の研究が行われている。

その他研究室の活動内容は、年間行事として新入生歓迎会、収穫祭文化展参加、親睦旅行、野球大会、月二回の定例会、ゼミナール。また、毎日の仕事としては、実験動物の管理、卒業論文の手伝い（三年生以下）、診療業務の手伝い（希望者）などが行われている。十一月には新幹事も発足し、室員はますますはりきっている。

### 畜産経営学研究室

本研究室は吉村助教をはじめ小杉講師、石岡助手を中心に活動し、その目標を日本の現状に即した方向から、畜産経営に於けるところの経済性を追求進めんとするも





## 畜産物利用学（肉）研究室

我々の所属する「肉研」、正しくは「東京農業大学畜産学科畜産物利用学（肉）研究室」と言い、やけに長いのが、本来の名称ではあるが、通常は、簡潔に、「肉研」と略して皆様にも親しんで頂いて居るものと思えます。この「肉研」は、農大北門近くの、通称を「番外地」と呼ばれて居る所で、その中の一番はずれに本拠地を置いて居るのである。又、現在の「肉研」の構成人員は、教授に「鬼原先生」、講師に「松岡先生」、それに四年生が二十一名、三年生が三名となって居り、言ってみれば「鬼原先生」を親父、「松岡先生」を兄貴として、いわゆる家族体系をとって居るのである。この様な環境であるので、我々、息子としても常に明るく楽しく研究活動が続ける事が出来るのである。しかしながら皆様は、四年生に対して三年生の数が少ないのに驚かれるかも知れません。これは「肉研」の誰をも、なげかせしめたことなのでありますが、誰をしてもその原因は分からないのであります。しかし来年は、沢山の後輩が入ってくるものと思えます。余り多くても困るのですが……。自分の手で、肉製品の製造が出来、又、明るい研究室での活動は、大学生活における満足感を確実に与えるものとするからであります。今年の収穫祭においても、我々「肉研」の気は大変なものであります。あるいは、

声を漏らしてフランクソーセージを売って居た、我々の姿を思出して、頂けるかも知れないですネ。そうです、あの時の美男子達が、実は、我々の姿なのであります……。実際の話、収穫祭においての「肉研」の製品は、内外の気も高く、予約申し込みなどで、一週間以前から、忙しい毎日を送った次第です。来年の収穫祭には、今年以上の品数を、準備しなければ注文に応じ切れないかも知れません。収穫祭の終わった現在は、四年生は、卒業論実験に忙しく、三年生は、今ばかりと、気楽な気持ちになって居ります。

## 畜産物利用学（乳）研究室

当研究室は、山中良忠助教授を始め、本年講師となられた古川徳講師の両先生のもとで、普通室員、特別室員から構成されています。本研究室は乳・乳製品に関する理化学的研究および細菌学的研究とそれを利用した研究を行なうと同時に室員相互の親睦を計り、その中からの人間形成を目的としています。室内は、室長室、準備室、実験室の三部屋から成り、その他、ドラフト室、乳酸菌を取り扱う無菌室があり、研究及び実験には欠かせない器具設備が完備し、さらに本年はガスクロマトグラフィも導入され一層充実した研究に励んでいます。図書に

ついても毎月、乳業関係雑誌がはいり、多数の乳及び乳製品に関する専門書がそろっています。又、乳製品製造実習は総合農産加工実習所において、市乳処理、バター製造・チーズ製造・練乳・粉乳製造及び酸乳飲料（本年よりチースティと名付ける。）など各々の処理機械を用いて行なっています。最近はまだ、卵の分野にも研究の手を広げ、卵の乳、乳製品への利用に関する研究も行なっています。本学卒業で乳業に従事している方々の親睦会である楽乳会の事務取り扱いに通じて先輩諸兄の御指導と御鞭撻をいただいております。

- 当研究室の主な行事
- 。ゼミナール
  - 。新入室員歓迎会
  - 。夏期乳製品製造実習
  - 。秋の親睦旅行
  - 。卒業論文発表会
  - 。卒業生送別会
- 当研究室の室員構成
- 。室長 助教授 山中良忠先生
  - 。講師 古川 徳先生
  - 。四年生 四名
  - 。三年生 五名
  - 。二年生 一名

編集部では「ふじみの」第十四号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとする為にも、名譽会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いします。

記  
四十九年十一月末日

要 項  
。論文、随筆、紀行文、主張  
四〇〇字詰十枚以内  
。写真カット、は随意  
。表紙図案、三色以内

宛 名  
東京都世田谷区桜丘一―一―  
東京農業大学畜産学科内  
畜 友 会  
ふじみの編集委員会行

発行日  
昭和四十九年十二月予定

応募原稿は一切お返し致しません

畜友会「ふじみの」  
編集委員会  
TEL (42) 二一三一(呼)

昭和四十八年度  
卒業論文題目一覧

氏名	論文題目	指導員	市川 忠
安形 稔	塩分過剰給与が犬の健康に及ぼす影響	近江	家畜栄養における非必須アミノ酸の研究
赤堀 誠	乳飲料の製造に関する基礎的研究	山中	西濃地方(岐阜県)における養鶏経営の将来性と問題点
吾郷 一利	山羊乳蛋白質の遺伝的変異	渡辺(誠)	アヒルの血清蛋白質及び酵素の多型について
青木 精大	犬の各種疾病に対する臨床検査法の応用	近江	動物排泄物の汚濁負荷量に関する研究
浅岡 幸二	食肉の小売段階における諸問題	岩館 正則	ヘアーションプーが犬の被毛及び皮膚に及ぼす影響 (休学)
浅野 隆	大規模養豚の経営設計	上田 正之	岩手県紫波町における養豚の現状と将来
秋川 清貴	一貫生産における養豚の経営設計	内野 元一	幼雛における必須脂肪酸に関する研究
鮎沢 義博	企業養豚の経営分析	内山 英介	專業養豚と複合経営(養豚作目を含んでいるもの)の生産費の比較
石岡 邦夫	豚ロース肉の凍結速度の差が再凍結肉の肉質に及ぼす影響に関する研究	宇野 健彦	市販各種ハムの品質について
石原 広明	群馬県北毛地区における養豚経営について	グエン・タイ	ビタミンB <sub>6</sub> のニューカッスル病抗体産生に及ぼす影響・血液像について
石川 正裕	パラグアイにおける肥育牛の経営設計	グエン・バン・ミン・チャオ	乳業用乳酸菌による大豆乳蛋白質の分解について

氏名	論文題目	指導員	市川 忠
大川 衛	ビタミンB <sub>6</sub> のニューカッスル病抗体産生に及ぼす影響・過剰飼料の血清反応について	近江(渡辺)	紙製スラッジの飼料化に関する研究。サイレージ化による消化率の改善効果について
大淵 隆夫	環境不良における鶏の血液像の変化について	近江(一戸)	鶏の生理的变化に伴う白血球像と動向
小淵 洋一	養豚における経営設計	吉村	九州地方における肉牛の交配様式と交雑の利用の検討
小楠 富夫	豚の細胞遺伝学的研究、特にリンパ球中のY染色体検出について	田中	肉製品の発色、保存に関する研究
小山田辰夫	馬蹄の色の遺伝について	渡辺(誠)	ビタミンA・D <sub>3</sub> のニューカッスル病抗体産生に及ぼす影響・血清反応について
押木 幸人	多数羽採卵養鶏経営の諸問題と改善方法(船橋市)養鶏場を事例として)	小杉	鶏卵における体外受精の研究
岡田 純治	都市近郊酪農の存立条件	小杉	都市近郊養鶏の動向と今後の問題点
岡田文比古	市販コンビーフ缶詰の品質について	鬼原	静岡県浜北地区における養豚の現状と将来
岡田 裕一	大規模養鶏経営における鶏糞処理に関する研究	小杉	秋田県の牛繁殖に関する研究
大久保純子	ハムスター受精卵子の子宮内転移の機構内に関する研究	石島	抗生物質(リンコマイシン・スベクチノマイシン)のM及び大腸菌に対する生体内における効果
荻原 博	粉乳の貯蔵中に生ずる不溶化蛋白質に関する一考察	山中	家畜栄養における非必須アミノ酸の研究
奥山 和敬	鶏肉の凍結保存に関する研究、鮮度の影響について	鬼原	
海保 隆伸			

倉嶋 勇	ビタミンA・D <sub>3</sub> のニューカッスル病抗体産生に及ぼす影響・血液像について	鈴木 近江	真田 正利	養豚と水稲作の複合経営における経営設計について	吉村
栗田 英洋	福岡県に於ける養豚の一貫生産経営設計	吉村	塩谷 徹	フィードロット方式による肉牛大規模経営設計	杉村
桑原 義秀	家禽栄養における非必須アミノ酸の研究	杉村	篠川 勉	都市近郊における養鶏の現状と問題点	小杉
久保川勝幸	中雛の飢餓及び維持成長時におけるエネルギー代謝に関する研究	伊藤	清水 教二郎	豚の産肉と摂取栄養に関する研究	伊藤
小林 秀孝	豚における抗Q抗体の血清化学的性状について	田中	清水 徹	属間雑種の妊性に関する研究	一戸
小林 慶作	鶏の血清トランスフェリンに関する遺伝	渡辺(誠)	鳴原 洋子	野鶏の肉漿蛋白に関する免疫学的研究	渡辺(誠)
小林 英世	鶏の腸管内細菌叢に関する研究 I、健康鶏の腸管内細菌叢	近江	下徳辺幸一	静岡県における豚改良の現状と今後の方向に対する考察	田中
小林 康和	抗生物質(リンコマイシン・スベクチノマイシン)のM及び大腸菌に対する試験管内における効果	近江	村松 正	馬血球の型的抗原について	渡辺(誠)
阪野 郁夫	家禽栄養における非必須アミノ酸の研究	杉村	新田 鉄男	中雛の飢餓及び維持・成長時におけるエネルギー代謝に関する研究	伊藤
作井省三郎	鶏精液の保存時における受精能力の推移に関する研究	一戸	杉本 孝明	屠殺後の経過時間が再凍結肉の肉質に及ぼす影響	鬼原
酒井 規夫	鶏肉屠殺後の経過時間が冷蔵及び凍結保存における蛋白質の変化に関する研究	鬼原	鈴木 好春	家鶏の無翼形質発現におよぼす入卵初期温度の影響	鈴木 近藤
佐藤 寿郎	市販ドッグフードの飼料価値について	伊藤	関 茂雄	鶏の相対成長に関する研究	渡辺(誠)
			関口 周一	産肉能力豚の諸経済形質に関する研究	田中

園井 章夫	ビタミンB <sub>6</sub> のニューカッスル病抗体産生に及ぼす影響・血清反応について	渡辺(誠)	千葉 陽子	F <sub>2</sub> S <sub>2</sub> 日製剤による家兎の過排卵及び過剰妊娠の研究	石島
高橋 真澄	ビタミンEのニューカッスル病抗体産生に及ぼす影響・血液像について	田中 近江	辻 信一	鶏胸筋の冷蔵及び凍結に伴う粘弾性的変化に関する研究	鬼原
高橋 忠男	鶏の腸管内細菌叢に関する研究 II、抗生物質投与鶏の腸管内細菌叢	近江	津田 一	豚シラミの駆除に関する研究	近江
高嶺 滋	(休学)		土田 敏信	豚肉の凍結保存中における脂肪酸組成の変化に関する研究	鬼原
高宮 俊雄	成鶏の飢餓及び維持期におけるエネルギー代謝に関する研究	伊藤	鶴田 豊彦	肉の貯蔵に関する研究、豚肉のCO <sub>2</sub> ガス及び真空冷蔵貯蔵時の変化について	鬼原
高見沢広道	家禽栄養における非必須アミノ酸の研究	杉村	弦巻 功	チーズ用食品の製造に関する基礎的研究	山中
竹内 雅夫	鶏腿筋の保水性に対する各種添加物の影響について	鬼原	富山 真	鶏の生理的变化に伴う白血球像と血清タンパクについて	渡辺(誠)
竹本 正邦	鶏胸筋の保水性に対する各種添加物の影響について	鬼原	トラン・タン・サン	素牛価格と飼料経済効率の関係	吉村
武田 充智	兎の血球のタイプについて	鈴木	永山 文夫	大分県における和牛肥育の問題点と今後の展望	吉村
田中 英一	原猿類の体温の日変化に関する研究	近江	中島 哲男	赤石山脈における雷鳥の棲息状態に関する観察	一戸
田中 由美	家禽栄養における非必須アミノ酸の研究	杉村	那須 充	石川県下における養鶏経営診断事例の概要と問題	小杉
棚橋 昭弘	日本鶏の分類について、特に鶏鴨の点よりの分類法について	一戸	西浜 昭一	養豚に於ける技術指標の経営経済的検討	吉村
田辺 淳司			布川 専一		

根岸 一良	豚肉冷蔵保存中におけるイノシン酸の変化について	鬼原	弘中 英世	犬フイラリア症罹患犬とミクロフイラリア陽性犬の血液学的変化について	近江
野崎 茂	鶏卵蛋白質の遺伝的変異について	渡辺(誠)	深作 雅雄	茨城県の養豚経営に於ける諸問題	吉村
野島 忠夫	家禽における飼料摂取の花粉添加効果の研究	杉村	深松 文則	反腹過排卵処理によるマウスの反応低下の防止に関する研究	石島
野仲 義隆	ニトロフミン酸の鶏雛発育に及ぼす影響	伊藤	福田 誠	市販サラミンソーセージの品質について	鬼原
袴田 和夫	家禽栄養における非必須アミノ酸の研究	杉村	藤井 茂	養豚の一貫生産についての経営設計	吉村
橋本 昌樹	食鶏処理場の排水処理に関する研究	石丸	藤木 信	日本鶏における蛋白質の多型現象について	渡辺(誠)
浜田 良男	妊娠牛における卵巣の経時的形態変化	石島	藤本真己人	鶏の攻撃行動に関する研究	大場(克)
早川 仁	都市近郊養鶏経営の問題点と安定条件	小杉	藤原 毅	若令肥育牛における去勢に関する研究(特に去勢方法の差異による「バルザック法・リング法」による腺並びに肉質への影響について)	近江
林 幸平	処理法とテクスチャーとの関係について	鬼原	藤熊 昇	競走馬における近交度と繁殖率との関係	鈴木
原 宏之	家兎卵子の腹水による体外培養と培養卵子の移植	石島	星野 欣司	貯卵日数の推移に伴う孵化率の変動	近江
原 慈宏	鶏コクシジウム(鶏卵培養について)	近江	前林 政治	凍結卵に関する研究、鮮度の影響について	鬼原
原田多賀資	貯卵に伴う卵質の変化に関する研究	一戸	松尾 慈雲	加工原料卵液の殺菌に関する研究	山中
板東 弘和			松永 州揚	山羊血球抗原の血清化学的性状	渡辺(誠)

松本耕太郎	過疎地帯における畜産を主体とした農業経営(岩手県上閉伊郡宮守村における実態とその展望)	小杉	山上 春生	馬(競走馬)の繁殖障害について	一戸
松岡 繁美	採卵養鶏における自立経営の適性規模とその収益性について	小杉	山田 昭博	ヤギと緬羊との属間雑種について	鈴木
牧野 辰男	食業性靈長類に対するオオシマザクラの飼料的役割	近江	山音 昇三	簡易臨床検査法による乳牛の健康診断	近江
水口 秀則	近郊酪農の問題点とその動向(静岡県函南町の場合)	小杉	山本 秀継	乳用雄牛肥育の経済性について	吉村
三宅 健	肉の保存に関する研究、味噌漬肉の漬け込み中の変化について	鬼原	山本 隆行	養豚における規模別収益性	吉村
三宅 孝	馬の消化管内寄生虫に対する広範囲駆除剤の応用	近江	八代 直己	畜産物価格安定対策についての一考察	吉村
宮崎 直人	世田谷区内の路上における犬糞汚染状況	近江	矢吹 真一	成熟マウスの過排卵における日令と反応性	石島
村上 秀樹	愛媛県下における市乳の生産、流通費の分析	小杉	横田 勉	複合経営における養豚部門の経営設計	吉村
森 博美	鶏腿肉の死後硬直、軟化過程における蛋白質抽出性変化についての研究	鬼原	吉岡 政喜	仔豚の下痢に対するガンマグロブリン製剤の予防効果	近江
森田 修次	市販ソーセージの品質について	鬼原	吉塚 公雄	放牧に対する乳牛の適性に関する研究(特に傾斜地と乳牛体形について)	伊藤
門馬 公一	ビタミンEのニューカッスル病抗体産生に及ぼす影響、血清反応について	田中	吉田 節	鶏とキジの属間雑種に関する研究	鈴木
		近江	米山 正美	豚シラミの寄生部門位に関する研究	近江
			渡辺 正男		
			佐々木洋一		

# 昭和四十八年度 畜友会行事報告

- 昭和47年12月 昭和四十八年度畜友会発足
- 12月 1日 旧役員と新役員の引継会
- 昭和48年 1月31日 卒業生送別会
- 1月18日 一年生クランコンパ
- 4月18日 畜友会役員春季合宿〔年間行事計画設立〕
- ~19日 〔予算案作成〕 (神奈川県, 伊勢原大山)
- 4月26日 新入生歓迎コンパ(4号館演習室)
- 5月 1日 一年生オリエンテーション(畜友会の説明)
- 5月14日 一年生クラスコンパ
- 5月27日 ソフトボール大会
- 5月30日 二年生クラスコンパ
- 5月 } 夏季個人実習農場リスト作成及び紹介
- 6月 } 四階講堂において映画会
- 6月13日 『男はつらいよ』
- 『仔牛の育成, 豚の繁殖と生産』
- 8月 7日 一年生夏季厚木農場実習において, 畜友会, 収穫祭の説明
- 9月 畜友会室の移転
- 10月12日 収穫祭本部開き
- 10月17日 講演会 講師 伊藤澄麿
- 10月 } 収穫祭
- 11月 } 機関紙「ふじみの」編集委員会設立
- 11月15日 学科内スポーツ大会『ソフトボール』
- 12月 2日 畜友会総会

12月3日の畜友会総会において承認されました。

〔畜友会〕

三瓶 史則	繁殖用雄雛における闘争除去の繁	山田 政文	主観飼料栽培における生鶏
藤原 修介	段として学去勢の成鶏除去の繁	石川 信雄	副施用飼料栽培における生鶏
町田 広実	殖能力に及ぼす影響について	三浦 利典	トコリンの成分動態の青刈デン
松浦 茂	燻豚肉の凍結保存時の変化に関	新田 直樹	ザレイシアサバ州におけるテングザ一戸
松田 史郎	豚の血液型に関する研究。特にA	佐々木義孝	S P F 養豚の経営分析
鮫名 定昭	肉漿蛋白質の免疫学的研究	奥野 仁一	広島県の畜産及びその展望
小林 正司	卵価による最適飼養羽数決定への	藤井 雅康	(休学)
佐々木正雄	肝蛭卵の孵化に関する研究	内田繁太郎	(休学)
指田 敏雄	騒音飼育下における産卵率に及ぼ	津金 隆夫	(休学)
野坂 幹生	高知県における養豚の現状と将来	小狭 一成	(休学)
平山 公夫	仔豚の下痢に対する酪酸菌製剤の	村田 明	成熟ラットの過排卵における日令と石島
松沢 幸雄	都市養豚とし尿処理施設と収益性	吉村 近江	神奈川県の発生状況の乳牛に見られる
			近江

昭和48年度・畜友会会計報告

収入の部	
前年度繰越金	396,888
新入生 (3000×166)	498,000
編入生 (1500×14)	21,000
転科生 (2250×3)	6,750
その他	5,600
利息	9,147
合計	937,385

支出の部		予算	決算
事業費	卒業生送別会	60,000	58,940
	新入生歓迎会	50,000	31,690
	学科スポーツ大会	5,000	8,805
	映画・講演会	20,000	14,665
	一年生オリエンテーション	30,000	10,000
	ふじみの発行 (第12号費)	150,000	141,600
援助費	収穫祭	250,000	217,903
	クラスコンバ	50,000	21,000
事務及び予備費		102,500	30,910
合計		717,500	535,513

予算総額 - 総支出  
 717,500 - 535,513 = 181,987  
 収入総額 - 総支出  
 937,385 - 535,513 = 401,872  
 次期繰越金額 401,872

会計監査及び12月3日の畜友会総会において承認されました。

畜友会・会計 大川 栄一

東京農業大学畜産学科  
“畜友会”規定

昭和四十三年十二月十八日一部追加

第一章 総則

- 第一条 本会は東京農業大学畜友会とする。
- 第二条 本会は東京農業大学在学学生、教職員、および卒業生をもつて、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。
- 第三条 本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章 会 員

- 第四条 本会の会員は左記の三種をもつて組織する。
  - 一、正会員
  - 二、特別会員
  - 三、名誉会員
- 正会員は東京農業大学畜産学科在校生。特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委員により承認を得たもの。
- 第五条 会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を

失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章 役員及び機関

- 第六条 本会は左記の役員をおく。
  - 一、委員長一名、副委員長二名、書記二名
  - 二、会計一名、会計補佐一名、渉外二名、企画三名、庶務二名
  - 三、一年クラス委員四名、二年クラス委員四名
  - 四、研究室委員七名
  - 五、監査員四名
- 第七条 本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。
- 第八条 委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画は正会員の中より総会において計十一名選出する。
- 委員は一、二年二名、各研究室一名ずつ、監査委員は各学年一名ずつ選出し、欠員が生じた場合、速やかに補充しなければならぬ。
- 第九条 役員の任期は原則として一年とする。
- 第十条 総会は正会員より構成され、本会の最高決

議機関とする。

第十一条一、総会は正会員の三分の一以上より成立する。

二、委任状は署名捺印(拇印を含む)を必要とし、議長に一任する。

三、委任状は総会に際し定足数に含まれ委任状の数は制限しない。

四、委任状の検査は役員が行う。

五、本条文は昭和四十三年十二月十八日をもって追加し即日効力を発する。

第十二条 定期総会は年一回十一月に召集する。

臨時総会は左記に該当した場合一カ月以内に召集しなければならない。

一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。

二、役員のおよそ三分の二以上が必要と認められたとき。

第十三条 総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四条 総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を

指名する。

第十五条 総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条 総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

#### 第四章 業務

第十七条 第六条第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、この召集を委員長が行なう。

第十八条 本会の事業年度及び会計年度を、十二月一日より翌年十一月末日迄とする。

第十九条 本会は左記の業務を行う。

一、会員親睦会

二、講習会及び研究発表会

三、見学調査

四、機関紙の発行

五、その他第二条に附帯する業務

#### 第五章 会計

第二十条 会費は年間七五〇円とする。その納入は四

#### 第七章 附則

第二十七条 本会規定解釈の疑義は委員会において、最終的解釈する。

第二十八条 本会規定の改正及び追加は総会においておこなう。

第二十九条 本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

#### 第六章 監査

第二十四条 本会の業務の円滑、正常化する為、監査委員をおく。

第二十五条 監査委員は、前条の目的達成の為年度末に会計監査を行う。監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条 監査委員は第六条第一項、第二項の役員に兼任は出来ない。



## 編集後記

年末の何かと酒宴の数多き中、我々役員一同は、酒好きの〇〇君を筆頭に幾多の甘い誘惑に一度も負けた事がなく、恋に悩める××君を筆頭には、秋の夜長に浮かんでくる、いとしの彼女の姿を蹴散らして、皆様に十分満足していただける「ふじみの第十三号」を編集すべく、インスタントラーメンとコーヒーで頑張ってきたのであります。嬉しいことに、各方面からも、内容も大変幅の広い多数の原稿を頂くことができ、ここに発行の運びとなりました。役員一同も、やっとならで間に打ち込む事ができるとか、実はデートとか？？改めて、原稿をお寄せ下さった諸先生ならびに学生諸君に深く感謝致すと共にこれからもこの「ふじみの」をよりすばらしいものとする為に皆様の声（寄稿）をお願い致します。

最後に皆様の何かのお役に立つ事を望み、謹んでここに「ふじみの第十三号」をお届け致します。

編集委員一同

昭和49年1月10日発行

発行所 東京都世田谷区桜丘1-1-1

東京農業大学畜友会

“ふじみの”第13号

電話(420)2131(呼)

編集責任者 国分良彦

印刷所 エルデ・タイプ社

発行者 平栄一

電話(429)1067



